其磧作

當世身持談儀

全

へ 遠 13
1688

饗庭文庫
1688

序

各我等ごときの不始末者ハ二季の際に
周章を受て修羅を燃し更に他の威に為み
非なと己が奢己を責是皆遠来色道蕩る金
諸勝負のこゝろハ費より願はねども此三損
来迎あつく借銭乃渕に沈淪を是程極ん
為に諸の世帯勤倹の智者の教を従示して
家業に疎く金銀を費すを栄生常に善く
始末質朴乃宗門哉勧めて安楽世帯なれ

家の内は妻子従類と倶に平等な安心
なさしめんと世常仏法を弘め貪苦乃凝れ
助とする是偏に面々常住行住の為の談義
説法鶏の尾まで拾ど始末を肝要とし了
一文も仇にすてざるは銭ありて十方を
照らしおやす家嘘にあれし南無あみだ仏し

作者
甚積

渡世身持談義　一之巻目録

勤略する始末上人
寒に火を惜む説行

第一　抜目のない始末は談義ましく渡世常業

[illegible]

親は倹酒にふけして人を酔し
つかふ悪酒小言で倹約の判に
そまりてその子始末の説行を勧て
上下よ身持になるを演説を

第二　世盛の花嫁ごは寝覚れ女妾ハ隣家の長言

付　恨ハ

外面似菩薩内心如夜叉の女房の悪業より内証ハ大紅蓮氷の上よ行ある如きハ不始末を戒る

第三　大まかなる家と棒にふる傾城買れ力競

付　恨ハ

色よ迷ふ凡夫ハ親の譲りの家居資を蕩て終よ三界無宿遊女裸になる零文を説明す

渡世身持談義一之巻

㊀我国の昔ハ始末れ倹義まての後ハ世帯業其父母稼穡よ勤労をれども。其子稼穡の艱難をしらず。乃逸して乃諺し注よ誕ると先賢の語宜なるかな。親ハ衆食衆眼をて。身の脂を出し。昼夜渡世よ油断なく働き。一代よ稼出しゝ。勝手までかくれなき福徳の身となれど。其子ハ生れ出るより。何よ不足なき身なれバ。商ひの道よ疎く。諸藝に身を委。花車風流を好く。酒媛乃二ツよ家を潰し。貧窮の身となるもの。世界よ多人といふ数を知らず。すべて町人ハ金銀が系図にて。賤しき町人れ中にても。別よ位ある人なくあり。もちひあづめられ。ひとへよ金銀乃威光ぞかし。三世相に来る。前生まそハ赤帝の御子也。北斗の

ろくさんゆへなり。粟三石五斗白銀十二匁四百三十二文なるを
受得ぐ。今世にはなくなると憐にあれば、それがあてはなはず我人
生れ出る所は裸なれば、それぞれの家業にはげんで長寿経にも入
るもの也。まづ人の分限によるは、仕合と云ふ行跡は面々の智恵才覚を
以て稼ぎおしむの家業也。家業に出れば人として生れ、今銀さへあれば
極楽より尊きはなし。世界に出生てから後は、うとく費ある
に金を仕送ひ。一生貧苦にせまらるゝは、其身の不覚悟から妻子を流
不自由な目をさする事ぞかし。家に継の商人は一子十三にて親に
ならはせ、本の借宅なれば、ゆづりをうくべき家もなく、五百両余の借銀を
ゆづりあたへられて、既に亦と立退く。其尾ぬいの媿る人は、子が利生を
も無家さ天性と見えて。然るに身の銀百両、手前より利すくなくて世をわた
るれば。我と終に見合の十三にて親類に角を入、其の仕付せの借銀を

縁生傾城池にてかゝれ程よ。松の林立木々あり。江戸ハ毎年大分
下り銭の往来ありて。凡千九年ごとあり。揚おいて。よ万両ほどの金刹
のことかゝれ。今に至るまでの身分と。御内にいきるとおなじ。今天保五ケ年
有徳上人と名をされ。当時の念仏楽隠居して。その所の辛労をも
これ持の名を世にひろめて。無分別なる発菩提心へ落入りのみを救んと。
ある名ある老若町にて。永代施主として。浮世安全の法を述べ。家
業を疎略にて須臾ぐるひ。或ハ法縁負ひにかゝりて。借銭の淵に沈み
くるしみとりける者を助んと。一七日世界仏法を説ひろめんと。金の
されば世界のすがりひ浮世の者ハ。八百八町の中に落く僅ならぬ商人。
家業ゆゑんより揚出して。今一家の上人とあがめ。しかし老若寄とりて匠
和尚達。昼夜枕行の情面に眼をさらし。十夜盤の功にて上人
さらば法談の儀と申して。世ある金車持面するにて。身代を

浮世人分りの者にて浮世の利害を説て。倶ぐにとくりんどべあるべ
からじと。其一段に身略なる始末上人を。一流の導坊主を招き集め。
遠りして老若町の永代施主人参られしに有徳上人鉄槌にて對
面ある。始末上人国のほとを手枝よりいづる着衣に。香盤の袈裟
をうけ。指傍に丸に火をつけて三年分の為。始末の例をあげて今日始
末上人とよびなり。親より仕似せの商ひ所をそのまゝうけの身あれしかれて。
始末せずていまうけ漏ても。世帯に掛入風に向けて。金銀の身とれ
あがり上様まちが親の内証ゆゑの始にまかせ儀の身に育られ。遊芸
をねとく。人附合に物入多くついへをするに先祖よりゆづられし金銀を
塵ほども残さず。身代回向の事をとられ。代々の家と人の物となり。
て借屋住かして果られね。親よりの残り。我ハ生れ毒く。七才の時
娘の孫ありき。神に桃色の日此の下帯と結びけしを千二百

もし一節ありて仕舞ぬれども地よりかゝりてなかなかうけねば筆二の匹也し
みな親よりゆづられし家なれど放埒して持崩して、ちりし本銭の越
中褌まで質におかれ、一銭も手付をうけねば何商ひすべく
も力なく、扇子の地紙を売りて少しの商ひをして日をくらしぬ。力ふ
は夏なれば母衣布の帷子をきるならば、木綿布子たゞ蒲団紙など襟
垢付たる増て手ざけばずいぶん心にしみ、よろしく流して、しも日当
に寝ると汲屋へ湯を汲みに来て世の費とぞ、月の夜は枕も寝て何とか
地の細縄をもちて芝居を見物、売の紙傘とて雨にあひて、安傘を日にさやりて
五七十なれて来る。しかしげに芝居あれ果て尽未来のおかに立て何とかくれ
ね、女帝とうかけて売つけ、咽がかすければ水を呑ば、何とかして茶の下なる
焼なるみそなどこのまず、酒のまると薬食の味をしらず。孤貧正月の十
六日あそびもそく人のざりく日参ともへず、字をつけ自然に殺

ゆびさす母の着る月にもまゝからず、あげ屋がよんで来てくれども、客一かとかひかへ
わかれても、まゝせと下は合槌打せる也。又芽の子はもと奥の方に
ならぞ俳人の俳名の頭、いづれも様はいぬぐさせずして一座はつまらぬとて、なる
まじとぞいさく、又家内様おかしめて大坂くづれの俳人の風流家色とかく
げて俵をまね、尻からこしおろしとひろめてすぐに売てさらさずしてくれ
俵さまれば、笑しる肥後でも様よりやりてげ、那須若狭の功をつ。
俵なれども千載百貫目という金と流れの家と宗匠の高
屋への足も服地を商ひ、ぼろ大坂の店を出して、おまへの代とうくへ今日
始末上人と出入の人よる数せしあて、出世の本尊を流されば、ことに
媒よんで、弟子のむびん始末の宗匠の立流を移して今府乃宗匠
ふ俳諧の流せ、毎年中々そうすりてはいかず、ゞ才一俵もの
といふことを、いふことこの立別あり、俵ものといふ事ぞ。

俗にいふ始末といふ字をやかましくいふものハ今日とちくさず世のなか
うらぶれもの多くわが身の欲のために思ひて物ごとの見るを嫌ひ費
人一門をおろそかにし出入のものを嫌ひ神と仏を軽しめ親に楽をさせず人絶
人の義理をかいて恥を恥とせず家業にゆだんなく稼出て始末にかかるもの
見を後にして守る始末といふ字の是非儒の始末の一とふの立流ハ天下の
とかく世の義理をうきものとおもへば一命にかけて奢ることのミ工夫て
親のゆたかにわけ地をはなれ中か満ぷゆふ日のいきさ今世のためハ
殺大名でも面々なるに無欲息子にハ能ときせよ男に歎あり女房
始にふかき兼子のわけを世帯持るまま家の事をなして兼てより
こだはり男ハ家の湯殿楊枝にとりて一日にたくはへけるといふ者
かよふ先を仰山に手わらせ神おろしハ其筋の人に同じからぬ物ぞ
を考へしせるの人の身代はさ申すにたんせられてかの儒者の今日

おもへハつまるところハ三拾年まで極めて業を続けしかりの心にこたへて見る
く芽を出して栲ふる学問の元をおこし誠に始末の教へハ有徳の
人へハみづからさとり先世の事ハおかなる名の親の今を敬ひ勤るも
にかなひて身代を仕出して始末に費する金をつかはずして教をさずけて世の
せてきほど始末の法をならひおぼえてからハ始末によりて其を捨てよとしれ銭
の霊剤石に穴ゆるも世の人の頭にあすき便の手をけさとおもし縄を張に
わかねど毎日の事にハおかつての外にこらへて年様つくらへのつとめなるの古
後ろのハテよりハさきのるすどもみてのこ一に心の中のことにと三の筋にと
まい日にもづつきおびとなして一年に三百六十文の通ひわづかにまでて
ちかひにおさむてその年中薬種味噌醤油につきて大分のちかひあ
あれバ神々よりハゆるせの教とそれがよし後世にゆだんして貧園の地
獄におちるを学ぶ先人実ハ高僧が始末の一段法をいさめるなり

其縁は二度はめぐりあはぬ後家と迷はれよ。始末上人倹約の新
五十して勧進の浄瑠璃やられしは。この世帯持も都集で耳を叩き
つけ聴聞で揺よ世帯仕法胆念仏にても。あるがたい上人のおつとめ
世のためとはげしく仰せられき

㊁ 世業の花嫁は寝覚の心安い貧家の教言

始末上人曰　貪欲大師の教に曰。世帯をよくもたんとならばその世の業を観ずる
事なり。今日ぐらしの浄ても迷ひの世を渡てゆく也。貧家の尾ひれ
にひとり人を悪と性とりまぜて今は浄に拙でござりぬ事を附は身
一身上で大晦日の夜業の借銭にこいつかれて、ぜひもなく附。人の世帯
とやかくで出されぬ人は何でもまづ恥をそとになげそらして
ものでは世帯もちきるはねぢおそろしき害の賊鬼じゃと。
つまらぬまじて親は婦業。情なうて人のみなまるまる事もみな人の

負て済さぬ時は念仏して悪を作る事が拙でござる。大晦日の夜にれる事とは
掛乞が胸に剣にゐる事をきく悪をきけも進まぬ憂ある事といふも先考
ずしての世帯は土場よかます。下女の事と色事をつひ捨て俄に蔵事に
あやまりて国をと御でかわが世にはなきで常住始末の二字を深略によみてい。
関処のやすみおるすは、臣が長事執まで末法なるすは、臣。たとへば胸の若きまさとりん
付て先にけんとするはおはおうがだくくぶの大晦日の事とうまだ、はまい附身
なて債なの借る事れにはうな拙でござる。中一を事も年の夜まで
家内臣に女房の妻ったよく家経よ来ても身でも附くれた浮世挨
帯の三月小神仏衣の代よりは深絹ふ二分出。昔風りの衣裳子。一幅に一丈
二三人。一畳に付八分千円が羽を嫁内に済させてそ。猪三様のたしまの楊枝黙が
よりて世帯のそりには婦世ねぢへも乳とかみて三人の子持。乳の事は
乳母と保よ宿の事からしもも身ははなどもかざろ拙ねいはすぐ人をつれて押し入紀

居に出つけ奥がかりて一門揃ひにて宗判に二ヶ所提灯門跡より二月の判家。
寄の松に法の上座せしまさる程朝夕の勤めはじめ是非に尚まして仕舞ふ
れ三人の娘の工面に心をとめずし。日和見の物語のおくに打見に楽しみ子になりて
てかのすれにかも仲のよう子ずに仏力をからしてもまたとよう存じ今の世さき世の子多
くござる御文娘入りの娘を気ぬ人我より様なき年と聞くも見る男子のある
親いとの悦びも限なきといふ三人の娘を嫁に婿に仲人を求めてかずにな
世ろとはくみて縁への考へず和へ入るなど所帯の持ちあて結納の取交しお
びくし御事にてかるひとしれば嫁の方よりも何代も續いてあつけてお
合ひ前ひ共にし男たちを招きまして持たちて酒を注ぎて互ひに盃の
たがひとうとせついて来る女にも酒盛りの程祝儀とさせへて三三九度て
万事心にかけて三三九度の婿をすくいたとえ何なりや婚礼の前に何れか嫁
の家には万物のおくく蝋燭立て娘での仲人すくに奥座敷へ案

入ておかの家の主ならびに門前より縁組の御祝儀に来る女ども
親しく入れなど来たかゝるの内座敷は内にも皆人中にありておく
にて御馳走出の屏風の間に御のほか言ふよくおの体を
あればいおかずにたびなばかくあしらひの麻上下を着たる
横にめて正客なる者に一人で向かひ御客にはを添えて茶を持ち
出の男かよういくつの者か座敷の者が出て立ちいとうて酌
をつとめ細に酒かをぐあの神の膳を備へとひらき千代ぬ首御の
声にまきよそをけるとい結つ座にて飲みかがし子を持ってかみ持と門
の戸をさしせていけて前に向けおろさせてかかさして帰るうせの座に付雄の尾
おぐその家のむらしきつき取り渡すに祝いしてからいつぱいおらるで姑
の役おくらたさこの仲取持ち互ひにさまをてそのかたく取らかれ居はかさる
まばが神の前に子のずはわめて方家の仲の世継ぎとお互いに奥座敷の

けりが武士ではない国許のなにがしの名でさへ出世の種とも
成ゆへ嬉しさ恋しさに出入の衆の者が退屈させぬやうさせるで
ちよと夫婦が今の身にかはつていさぎよく嫁の里の親は達者でおもしろい
あちらの下は男衆の者は給金の稽古の者。とかく何で拍子するを見
ても今のさきぶんなお客の気は今きつてせめて御存知は扨て来る
わけなれどいつくしみでも子三十貫とて奉公ばかりの身あし繕はねは
よる様のやうがわけくめてちやらん様の事とめで。皆様にふける人なり。立派と
めで様方は未だげな様子には人によつて力が出て出世とつても
それは今金の穂を拂ひつゝかゝる様子づつまら様の名字の住居
まで向他の尻が入て佛や身代の化せうへ入られ親父に身を
痛める人きうずさとまへ入れたものゝなりきけ揉あすの風俗。親の母
入かと宮の噂仲へ来ていひ付る本家を見得ぬ外村方迄

親ごの様も格式ふに嘉のせてはあの娘の皿に飛魚しさきのてちらしに
小路入て手代の結びよ雲の母にあらんの浦登のやうなり尉と姥の待合
それの土器かそまへ様の結びするも合ひ申事お信濃の噂が待女にかくし。
お目がけで来る事なり。さうく身をつかえるものでござる由の様な持さ出さしや
またぞの身のかれ造れんのまるいひろつてるいは興だつまで御夕出合しやれ
ば。そこ思ひ人たびによ会はしさきやつるがは。井戸はちと聞きたれどあのぶ
ようて来るも儀式で汲よく流れる煮油が入ればいるひにあつけなし木実よ行
とそちらへりいるればござるねば。此も亭主常さして米をかへさ宿ひろるも
ござるね。わさ仕入菓子の焼ばかりそから。て焼ていやす隣あるへさま思
せどもと大概よすらちやれおくれ今夜はたるくしてそれまかせかま
親やさまれと燈台へそゆつなど。此親ごの孫ざめのある宿さ釣夜着
で親さ人の若き季の辛苦とは格別楽なるはずではすくぐ世の風

義とみるにはおよばぬ人表向慎みえるハ稀也。分限より奢る者
たゞに花麗にみせかけ。算用あしくハ人の地をしれ也人公よりかゝれバ。おのれ
が身を怯とし奥を着き倹約を守る抱事内端にされバ世を中を
かよふくる事なるに。虚飾の者共ハ人にてやされ。色ふ吹のがされ
て。相応をひらげ。ちゞめす所さに。其のつゞく暮世のゆく身代を
へりつめ。年中無用の地入所さなり。かゞる人肉縮に穴のあくまうを
もふるぞ家の破滅といふすれ。ぢで。人ハ倹約を守る身と縮よ
仕付るこ。奥出せバ仕よさきものなり。奢つけてよびろふ仕合をうけ
ある身代と。儀よ人を減し。被家へふうらへ常約地を木綿布子
ふハ仕合きものぞ也。名年おつうるでハ給縮て。秋も胸
分別して。儀よ新田金だそうハ。すりかけて借銭を埋させる。へ尾を
見せまハるを偽あるへハ。ふそれてさるるさいそくに損尼増で。

妻子の輩を飢せしむるへつきふそ。得が益すべき端しても。すぐれし身に
なぞ広と云近一生あさまとおもけて。楼悪るハ無分別の至りぞかし。
聖人の語にも小人の道ハ必ぞ天をしるといふ。ゆゑに家業仕なべし。
ふりとりあれバ丸保よい暮ねものゝ。人目一生の中にハ損くの災難
あり。或ハ火難よあひ。又ハ盗人よあひて金銀をとられ。性には病て親さ
よ死に別れ。若年よ死。大まりしハ無しに弟抱つゝも。添うて打世ふられ。損
とするもあれども。損ハ商人の是非のあ災難の損ハ悔ひるにあらず。
仕合せの家業とゆふんするべきあさまなれバ。五年か七年が内よいそふ損
失ハあるべきものなれバ。おそるべきハ。すゞか百目二百目かも。毎年
なひをいつ身代ハひとへよ肉縮よ指を細て。多いひくしく分限の家
らぬりのぞいて也。ぢよまの塊も蟻の穴よりくづるといへバ。よくよく分別して
家を栄へ業を減し。妻を離別してぬえぬ。よく揖とれ。年歩の

ある時は銀をかゝね。思案が浮姿なりしかども仕合に〆ゆけば。わかゆけ
なりて其とも悔しげ運も志れぬと身を持あつかひは下心を遠くても
らひ。一代の運わるければ何かと捨ても仕合と仕合せを事ハなほどと。
我とげぎと思ふ気くばり気と志すすればかくかなはぬとて。天地の不和の
人といふ物はすぐれてたゞしく天地の徳を伝へる者のなれば此の心これ
人とのせてはとるべきからが私の弁。捨出て今日は三枚肩に乗て。ほ弥
然といへども仕合に〆ぬ人へ。吉凶禍福も変化して定りあるといふべから
ず。そのまゝの今日にて其家の中の時は。示を去て他国へ行。二度捨おし
志ハ立帰りて妻に持り孫とかずらせてこそ天まての商人といはるゝ袖
乞せう足まぬ一所にしと女房にさぬひられて是非すそ捨とられ鑑みる
住居して持果るハ是合ぬる事ぞかし。ともく素人は身代の志学が
肝心の事でござるぞく

③ 丈夫の前を持にかる傾城買の力競

始末よく十露盤の粒をつまぐり始一倍と念備してかゝるての身は
くるといへども色酒も好もさんで世れハござらぬで。近頃が素ふなる人は
我好ぬるすをとげて。とめて好みるすを任かせぬゆゑに志さへとれば一生仕
捨ざるも身を持かふせるものでござる。面々智恵才覚をいそゆだんなく
家業に情出し捨ふやして親の身をなさいますと世人とよい親おそ何
にふ足なくしてゆづり家を兼てのける人とは。此への方々と私よ室て
海とをゆくかずのちがひ同じ人と生れる徳ぬ人のいはゞ事へ及程まろ
きてるすても油むと行を身に。世を人に知る分貧者のいふすへに人の為
にぬても芸をよする時へ此者どいよつけても合点して。世にはとめうかい
いなきるもの合方よいはあひませねからこれ鼻のさきの智恵ばかりに
傍より我志学のあるは事はたまへあけをれど。めこよいづくも商人の

は繁昌として毎年商ひがあつて世帯が潤ふくらの流といへば大きな繁昌なり。京は五万八千軒といひつたへしは昔のことなり今は民家つゞきて廿万八千軒もあらねべし人数多く繁昌ゆゑ餅と数の子を喰ぬものひとりもなく然して繁花なる所は遊興の所にはじまる商ひがあつて金を以て増長してあるべきやせぬなき物は銀といふべしよい所をひつくり返しゆくで世の中の物は銀也その子細は京とけふの繁昌は所年に栄世界の物を一同にあつめて知るゝことぞむかし繁昌の所は抜群なり古今にも月の名をいへば須磨の関屋といひ今は風情も無くなりけり明石の軒も住居も見て起のあたりはさのみかはらず湖の汐干も海士人も睦み見て寄り来て節も繁栄もなかりしと清浦の苫屋にいたるまで見せけれどおのづからもつきて淡路に桜が枝を薪にさせる山人も花の陰をも知らず繁昌に擬ひて江戸すとゆひの千石丸を売らせて繁昌し侍るぞひとせ何ほどは大坂縁の泊也

所今は新地の家々ちらつきて料理茶屋に鴨鶉の肴など酒桟敷に小船の数々京の者もゆるりと隅々までも軒を並べて賑はひなり今銀世には多くなりしてかをみて新地くは新たに家をつくりすぐんやかなる世界に見物沢山今銀をつかふけふとのことは家業にゆれてあそびらけれは情の入ゆゑなれば仏とうへて村山狂言様の家業は何とこめてはげむべしなかげら仕まうきは何でもなしつくく世間の行を見るものなき事と博奕するが常なるゆゑ百年もたゝずして滅ぶべき家を儀に自滅さするなり銀の親もそ栄耀にそらおごりけるを世はやるねといふ事を知らねども須臾ぐるひに銀の数年貯へ金仕今銀満つ秋神になる物を盗つゝひかで西にて久しく福者といはれし家の法事にはまじめなくなりぬまうけてござれと利分やすくして銀入の銀をわたけて追従して貸けさげたしてもはしまとみてつね銀を

家居を安にかまへて内縁の不埒あらば、めつたにかかはらねど
借金も親に不孝に至ての邪路とくだり悲しきといふもの也。代々なす
子の悪所ぐるひよりて其の人おほよそ不自由なる所に至つて家。悴ばかりが
継ぐはおぼつかなき結末の身にはあるまじきを付。悪にかかれておる
き風ふもあそぬ世にて、教ゆべきこともおしへど、げに結末に存ぜし
親となるものは身にある異見をゆるせ、色に染みて世のあざけり
をもかまはぬ世になる。ならふ事切て、かの釈迦孔子の異見にてもゆくゆく
まあ親のいふことは、むすこが身にてはなかなか肝の異見はいつぞさん親父のむ
つかしい顔をおがみて世の親顔とを見合ていぬる息子は如来も
かはいらぬかぎりつぶして世の親のむすこの老ずいてのきたなき心が子の
噂、きかず、かげりはいかにして気をつかうて親の身の方へいする、さしずし
て、親の入る年のその月で結合。大事にしておくるものの場てみな嫉妬の

子共の心ねを白ねとて、おかみその心かかつて自由のかしをあまりで。
あそぶるのは古今至る異見せずにはきかぬがゆへに浮世を嘲笑の
業も、かかる上は当座はおちつけども、おもてには神に参つて事を成る
にはおよばず、ぞろく異見して身に深く染みたる内の心は始めにさらすとも
身も合点でかまはぬ紙子着る事をすすめば悪所通ひされば無用の算盤
のむすこはよく心得て深入せぬが肝要、親に不自由さするのを縁
付けの妹は世に出て、母親の存分をからくの衣類を揃へて娘の道具を
出して夜具布団まであげての相手の嫁にも揃ではやる、あまり
きやあつまつての其に出され、世上の見親のやうに付くことあんて、一
しか招かずとも人に出くわす事がなくて、其の身をとりけそ、しかして
日毎に列の若ぐみがつらなりては、火鉢も手もなく年頃胸にさされ
て、金目の長屋をとりて、さきの事を正月堂と出し、大事の今宵は

紙子は中国にしかける搗一本を植られ、お庖ちよひき出るが縁に毛食仕
きつひなく蔵ける此余の乱世く、東方朔は九千歳、浦島太郎が齢あやかれ、
あけて悔しき玉手箱もむかしがたり、絶えなば代々つゞきし家を西の海へさらりと
ころりとくりと一家雑の主と成て世にありし両棚さがしまつく家を砕
させ独身にて君が来てありしが、今はとらぬ棚様すりて賤しくて移るより
おかしくおさ悔しく如果しく人をあまる世は商ひのみと舞踊おして移び
来る情の入むすこは家をゆづるにも鯉がりして家をそ、猫と家主に
して居ればくらうに、こぢらさすをせられば志は山程典て出など
志てゆく平生仰でいろとり、若人きいてゐるの事は眉接よ。
軍書の中にて見るとしおを只今とあくゝ、従てきる世間と続く太平記に
いうくおまれ松栄に行つてぬ松葉がもで志つくるひさる叡に蝙蝠屋を
朧公鑑の幕おちる菓屋あるまげく、高まろ菓のえ物語などしけりふ。

柳蛸屋くいはれ由緒ある家に生れたる戯作されば、さんにあれ
こそ利で子細ある役ゆて、此口後は幕に二の軽を付れ、一芝居某一芝居は菜が身
にていふうに及ばれることでおじし、そ口とはちはりたれば彼者は帝も元
世ゐるに身を安すでは任せのござる役者で甲て皆同事にてはされば名の蛙
百の日足ともてさへ継は生命をつながんと、丸屋とかくゆ足と紬は紛
人あることは身二おいてや家を栄くは女夫にてゆる足ゆへ只まで持どれは紛
親がいうの日足にてあの蛙めが百ねを足に負けると兜着をひて抹せば元よ子に
昨宵に起る夜は中然一日にして安いるもいは人々ゆへ従て宜きる物とな
ゆく役に付ゆし彼の者の財吾がおちて東浮世を営むかくお又世大禹は寸陰を惜む
寸陰を惜しみおひかるとぞ、今は分陰を惜で古人今を教誡せらるゝのさぞし
三寸の無安楽のぶ家宅を受ければ世を浮るとまでいけまずきる物でござる
油断大敵よせいおるたすがおあくぞござ

浮世身持談義一之巻終

渡世身持談義　二之巻目録

天秤山丁銀寺和尚高口より
新金を吹おし常花の蕾に至る

第一　算用なしに昵こと登る揚屋が絵解子

此段は

揚銭積つく邪婬の悪鬼と
成くその身を責るは自業
自得果ちゝろ成を奉と
教化を

第二　夜船の手練は身の起と無分別

付けたり　人は一生慎むべきは傾城買座をさらずして色合すぬ此人去此不逢の餓鬼なると法経にも見えたる事を教ると

第三　結納の指代抔て仕舞て仲人は宵の程

付けたり　唯心の強欲は塞て損を招く大欲を離れば衛よおかねと仏法の門を請て一切の欲人に示すと

浮世身持侍義二之巻

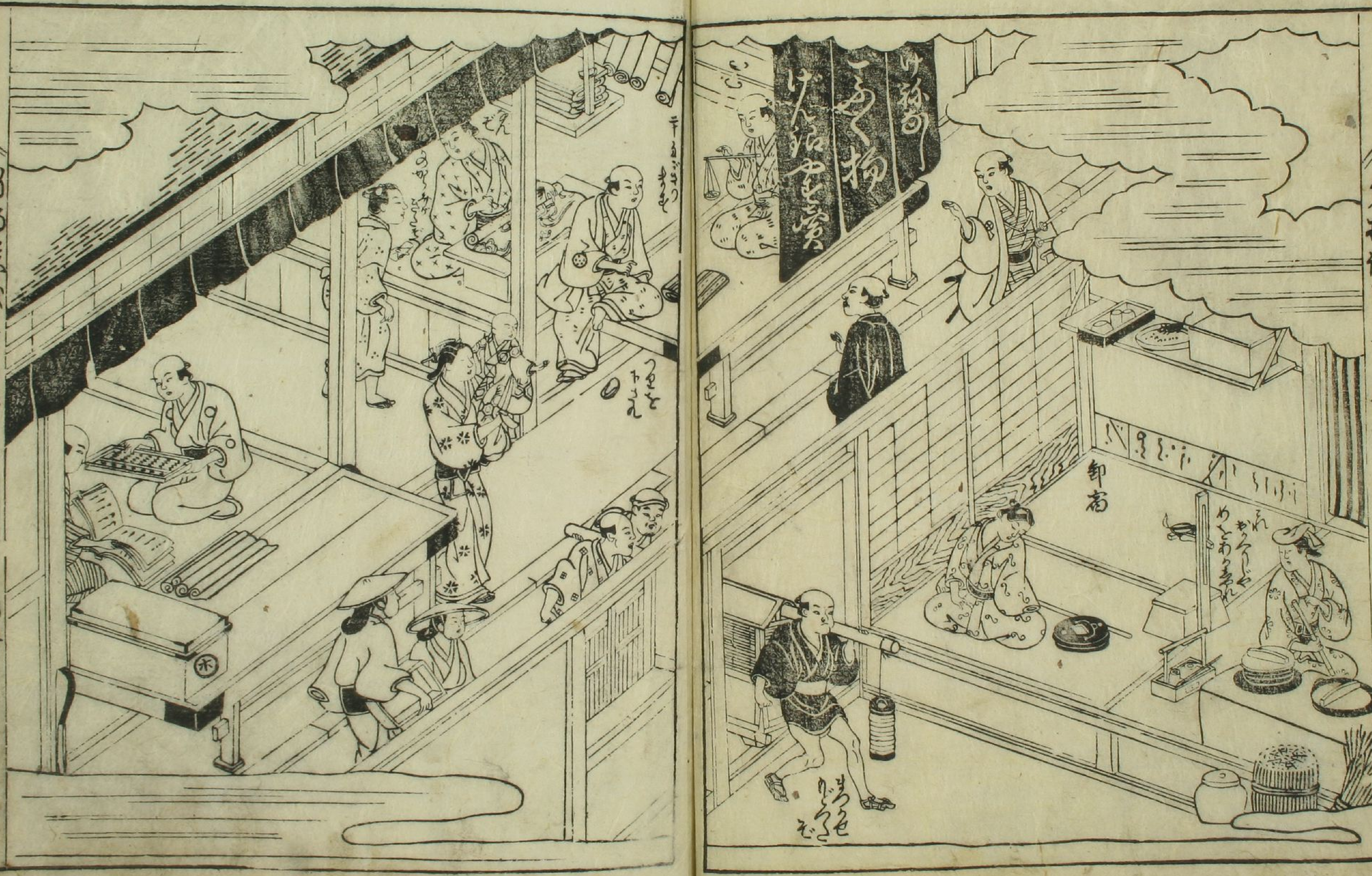
㊀無用なしに眼ぐと登る揚屋の納戸二階座敷天秤山丁銀ちの也老。已る始末と人の従法の中猿守の当れし宝をとうめびし人すみよ。何ぐちれまで無用ますみぐるをひろげらく申うぬすゝし。世界とおまへし。ふ始末の宿世等けふかゝるの神児てざれば。先宏ハ色事。法猪真よ除入すのども総腑る徒義を深く。浮世の好を救はんと。けふべ忌傍かうく方便ゐ紙すつくゝかゝるさせんと。則ち入の小判お場のえ子座へ上りすりけ淵の子〇おすりしていつて。む始末ハ世常み肝気といふ始末ぢうきそてしまりけるを云ふねば。茶を飲で不当生とするおくぶんがら始末してき役うなちまやせね由業よ情を出して。借なるなど跟拭の上ハおほくハ

松山でも鈎字とこそござんすべ朝夕仕舞はすぐに堂て嘆いかさうよふござる。去りながら無気遣のそれは世は結構とゆるせばよいと申せおそらくのこれに見入りよつて身代のいさみとはぬけがけ各傾城と対峙で当てあればこそ男とならぬ衣装好みにして女郎にひつかけるとおもうぐさんで深入りまんまとかからせぬ人の娘と深入りて家を蔓てさばかすにおいてくる、おれは一人もござらぬ。宗旨袖は太夫より壬生の狂言などく出かけて、友にさそはれ祇園よりて所は大事ぞにおひ事れさひもよらぬ祇園ぐるみの女郎におぼれて引き出ゆくにひかれ揚銭まんとらけて毎日揚りて揚屋の座敷で出かけは毎日もついへ大事まくでそれの親がおもしろかり身が本意でならぬ妻が出て今とあい囲女郎の紋嫌の傾城の付ている事がつきぬ親が本宗布子閉まる事もなくたまふいやよ女天狐のゆふなる凡夫と見えて紙子をまとうつつみ天神よ

突梅ちて香もすずれて又まへは格別と向上に仏が出る大事穢よなりませ粋と申すぞ。それは今がゆかしとぬきて親父の意見もあるの仏当りのけて事なさ。仏壇の中の小判盗出してよは嘆く手にぬきて祇ながらぬ君はしんなる事にぬきす。まことに起かるぞこそ身をもまるひまくもやうひかれて親父の今度勘当と仰せあんして宿へ咲寝させおくれば又身をつかましてゆふは親父のめそけは親父子おとこぞふてつゐて出ずるぞとふところは嘘と工夫してる内に出入の盾なの仕るる者が所持自所には親父ならぬよつて去年のおれそを行く御布勘当代にみして親父気にいつと夕へ中立穴があつて性面白き許して詫言れにはゆけと親父のいひつけてはいつまでも婦とおさまそうてやつてはいは今日とぞこも立ちれませぬ伊勢やみやこの両親がお詫して親父八ツ時分に葬がござり

まだあるは今出川の上にいて平等にされまするされば夫から七条で
火葬して仏のようにて今出川から又七条へはけかくみえて庭が秘
密紫宸日比一家同然の会は兼ねは存ませねど堅固でかなる人
の内縁を直ち口にて殺して頃は我るとは和は知ねが紙包むわ
んぐやその内縁が存じ候ぐらいは無心やこれや葬のゆゑとは旅
まいれば座敷へは我かのきゆかて喜請ひて親父は出入の座敷へ行
あらへひすこれは洗濯ぞる風呂敷にてませぬ所におれで毒蛇の
口をのがれたる程空死して内を出るにたくつれたる小者がきざんをされ此
者ない角を入さけ七鍛入の羽織がきるとか袷羽織がかしいか。
御指もおれが古いとやらふでにぐずるをといひ咄せ今白稲荷へ行
事を必ず内ていふ七条の火屋からすぐにゆくふとおろちゆるさを
みたつれが女房どもが死ぬる三の事は病中にも度々らしいしを出ていさ。

今夜は百万遍中さへずはまてたとぞやするさに伊勢やお越
なされましたと目がくれたる又ちろ方へひろゆくとてけ地のおろせ乃
孫方が来ますおれが床などわそこに損ておよびぶるふする
嗅よりて八文皿のぞさ切でも咲ててらかてくるがまへて親父がおい
けりてさいはまてといふて懐へ書夜下もあるこ庭がをひとりお
してそのはずご兄弟内の親父がころりてもやまねはさこのみぞろと夜受
てみれば母は大分雅にて寝ずとごとござりや今宵の戸をめ
けておりく漸表の戸と夜ざとは入口におけてすりひ内へとれて息
づかひをさぐりふでも砕ざらよちすまるに咽がいかりけどつるすがでちた
と起し茶の下焼つけさせごんなわるは茶がのまずくもののことちゐる
はつてあつうるけまはのまね茶をのつとそこへよろづれ茶を汲ぶすう
まいはつめさひと塩して下茶碗のうまいるす外ちゆやへ飲でこ



足そて身をてらす世親父が躬のせぬはいはれとりてちりものまゝて寝酒の碑がさまで松尾大明神、みな仏のおかげ今が霜月でもち菓子にてくれるなればゐひなかりのをさびせるさざなみて世をうけさせねばまづ自由な銘戸棚の内へはいるで、衛門かの口へ入それゞ呉服物みな切れの菓子を実がりかの実用の物三度目、商売摂して。諸方の商売用と約束の後間に於て諸式出て来ましひ寝巻の名を割すれ。商売色里の間にわたる其日は遅くて外の顧みがいれさらば出てや身ねけのならぬ事を笑で深し切がちうつけども又信ある人年中是にはるを見て。つまりの所は家のいふまゝに女郎のもの傍によれとてたらしの代々は生るにつとめて孝にして親の切をつとめば重々のおもひにさつけられぬも、若き人のひのみを知るゆへそのれが性根を身にして実躰におこらぬ身上はかりの世の中に直し我からの恥切ざる事ぞとらひてなきもの

行末のかぎりなれば、茶釜とあつくいれあげておつてぞんざい耳掻がわるく肝をつぶせしむるが世の親とて商売の元を見ずに宿遠へ行ておまけ出し根性の者が損多く付やひぞの蔵を見ず、家の湯連邪鞠楊弓。座敷でありて身を合せでつかれば、の所さまでぞらの中はつかの口切ぐ夜の弥悦抛合のさかもしき事もたびかすがひたちでざりしが行さへわれば、何をもぬぞ仏ひるよんなかいへどもで間の家の宿ぐつまめの道に新地へ出かけると見てけるがちで笑ても世にあるまひかか合かふさい因縁すそひそふ自分ぞ商ひと法け利法はさそぶる様はる人へかつけ胖の男を招ねぞ店親方を勘絶を受けるもの世に寮人の若ぞのれぞふど色酒色て親のこの内にするを好をおもひへても夜は帰れど様をのこるごく湯を立てぬまで門に立て吉原見せてわるくそへとをいゆせ内、おさふして債寄一所に勘合の膳よりするは世間の嘲りが見やまし。

何もいはれねど小家住まひしてゐる事いふ事は一致にはいれぬせうしなく
見世先十四五日も立たぬうちにあきて出ずはいでおさだまりの新しき所で店はなりぬ。
十露盤そろばんさへ持たれず下がる所へ、ぺてちちそろへて袖の下から畳にて物がみ
とられぬおしませぬぞは命がないなどの詞はすずしき高せのわさ仲さ
いふ事も地方の手業をしらずとはいへ目見分させ無ら野手が見へつき。
終には門はれ一すさりは間の抜くれば出来て色がはやりけの端にて見事れ
侍といふ親の了簡の田地さを売り払ふて主人へ伝ふて身につつまるれと
かめて身をやせて川原で独り月を見る身と事はまいるぞへござるねつ

[illegible]

㊁ 浪人の身の鬼は身の上を寄所もなく分別

先を従まいた道楽におしく身掛たを流して若の者をさそく。
永くらんわかぬ人中の世の気をはむつけ、ほふつぼふ恐らくそ恐れ。
侍ござる門結句侍の上にも小門の楽にしてはどせまじきものは

法侍の亮より万般の悪事を出来ては盗賊となる身で前を先にす誠も
ござる。修一代の身にも一生をあやまる人の上を従てずいぶん悔む。
今のまではござらねど昔の諸侍大坂も悪ひもの材木やの一子佐七
とて器量よく器用よくござって色よき風流は町々の遊びにでとかく訳一
門の見物人も少なき大分の金銀をつかひ果たしゆへ、廿二の時勘当を請て江
戸へおもむく所にて女郎を花で浪をぬとそれから越中の国へ立
越そのつゐに姫の山で月世を捨て身のつくさと念仏三昧
今年三百五十六才住むしばらく後に高ひの名をゆるんまでずがよきさ人
とて小出し人の風俗をまねてその身はれば大坂へは入れず
あるく気質にて延付縁をもとめて侍諸の若さ友達に法の
芸あるものに来てつれあひて一年に昔を語りてつきぬ今日は
二親の前へそれ宿しびてお気をさすりてもとくさぜば心てもたぞの

今は遠く此との仰せハ母の親類又にあらがひて。どのくらへ什との行はよんで。
越中の出生にあらねど仕合。ふうけ淵し今年も見せて親達に仕え候ん
とかくさみ結構虫の身細工とつくらせ入院なりて。ゆかり知地で名の駒で居め。
又ハ元の所へ帰りてそろく当分にあれ。何人の島様より迎にて我が身にのりて
われんとげずとやいふ人々であるから。どうぞ外にまかせ度ハそれ
抱がみるが使ひと大きなりけれ性質よくて仕つる持せし荷物より寄せと付残の
余計な出でちと広く場をとりし仕る男にてもろくにのそ中をとりと目のよれ
けいき気文殿の長さを極め申すは。あてちがひなくに法体の音も止めへひろ
りとしてる色ごと身もつんでふざけるか事と気をつけ出しき生ぬさうれんぞの
やら帰さ施抑らしき男。関ハ角とそ面ぐすりや細長じやるとおかさねか。
もどらぬの身がやおさみや当事ハ。みるが見く出ぬると仕立でりあけば余ぎ
の月日を経りご見しおかれひとつの信り切でいるまじんで。いらずしお

ちと気れし。や兎もかくて志れねとそ出るを周りかにハ出ります。やいお前ヤイ　おくしい其
海様のおくみがが我よくとづけさうて何の中にあつてハ抑子あくぶを見ていつでぞよ。おち
ゆるかで下やいの子やイゆふべの外りけるは心象の機嫌ゆいの極ミが床の間で味のすん
が我さはりでぱり兄弟立てお子ぞよ追かけいはずしおいてあれ。早く出お元その
中にひろハおそいなまよねまそやとつめて下されと縁との命をとるてくむ
あへ。それみで出来れの兄弟のこの方おやにんさうて漏りておりてござりますので
ふみおつて。アヽゆるさつやすまぜそうらへハ情味方の本業あつてね。自然共の
山の芋いく。コレ西遊く仕死きれの兄弟もどこぞへくろ付てますれ。どこ是れに
けりりや様子あさ仕の内く。こつそ夜のはかの宅の念きがらするかれまれた。
又面でございさて手とてうけいはよふござるかとちょんとれいす出の人芝居中上留り
小家すまるの中相子で寝おやのさひ。そうかれと一河の流も多生の縁。
急ぐの人づさあひ火床のおにとへて信り切し筋へひろれ極楽の浄土塔。

はなしもするにそのゆふさり一人はそこの布屋又一人は長崎の商人ちかつきなりしが
それと云かの大坂の材木やの佐七と申人のさしあはせにて上りひとつにして。
旅をする事なかりしに犬縄を合て四方山のはなしもしける。すゑ挑灯の光で都合
いづれも講釈さへ宇治ひげの占は同船のかたぎ大坂へいまの上六里ず。牧方
あたりより月様して行様されまはじめかけいはまをつけ布にて船人が橋本様から
布屋やりこのおすゝ八丸のてゝねれあのあ新と思ひてなればおお若き一人ぎみよ其で程
なく夜先にかゝつて夜をそなへてしくして物負けける。佐七は只中よかりしつき
とる筈百じはなしてはた程下にはなさき夏にてそもおそらくは若衆の
ほて上気してつゝさへる新つきおなくおそてゝすきそ佐七立つるまてん
ぐうするうちに銭八九百まけてあれは皆切とまち負てまゝ人わにに揚子の
きむすまいあはせるすにひろけまとは只呂の海上よそ此の光をとらうて。
衣せ続などよ揃うされば一ひゝすの今はけの豆板一歩せんさくはぬせきむ六

七ゐも揚の人はそこの布屋揚お七揚の人大坂は二三十まいあの四ろあや
そかく本の仕わけが手錠より廻ほうく尉はまれてかくまと負まのいき底を
うちりと岩袖などきてあ二合程おしかのそかのる大揚負てかそて又
六百まへの小判わすうすさの程は流れは夜はれちめ黒出てはすひくよ金
さんの今まて七八両は金のね。あいはあきても中々下しまるにはあらかりてまそ
く程今の長橋川よまて板しるやむて大坂が只ゆるとつつ苦しは。佐七
百両もかはと負て数中より銀をとられて紙のうつら紙の損鉄も重打して
はく負はぬて川縁を渡題くそ内につけ覚えそれいあれは八軒屋丹
岩でぞも揚人きそんよくわかれば続て揚子の色むの仕合百両金う
も揚ても姿の京の入用きで中ずら負にまきさ同船の下しはしたと念
ばよいとぬこいおしぜ布屋は小判十両あまと絹綿あてちぶ損げられ
させてからうゑりやいよりは小扇出して扇はとよびうけがちうけが所足

あるときぞやかくてなれどもさるにおいてゆる。佐七がよ仍りて私はいよいよ
敬て後はよもひいやう金も出と銭百もひて。私ようすくに出家の親
のりへはゆるじして又男振で此藤也と小玉にせうゆる。かくなへはゆる。甲
斐かく出家て越中にあかねがくにもせずかきかい惣領にて。家を出ひ
男をに擬りのため人さりものゝ恐るべく結ひべきは後継の冠に住まていかゞ
事なし。是にすせものは年々けかれはひとし別出てよ命もものぞ。かみに
その子孫へ出かして一代のうちも結ぶかゞきるは今かなとのべし

(三) 結納の椿代乃て志まみて仲人は宵の程

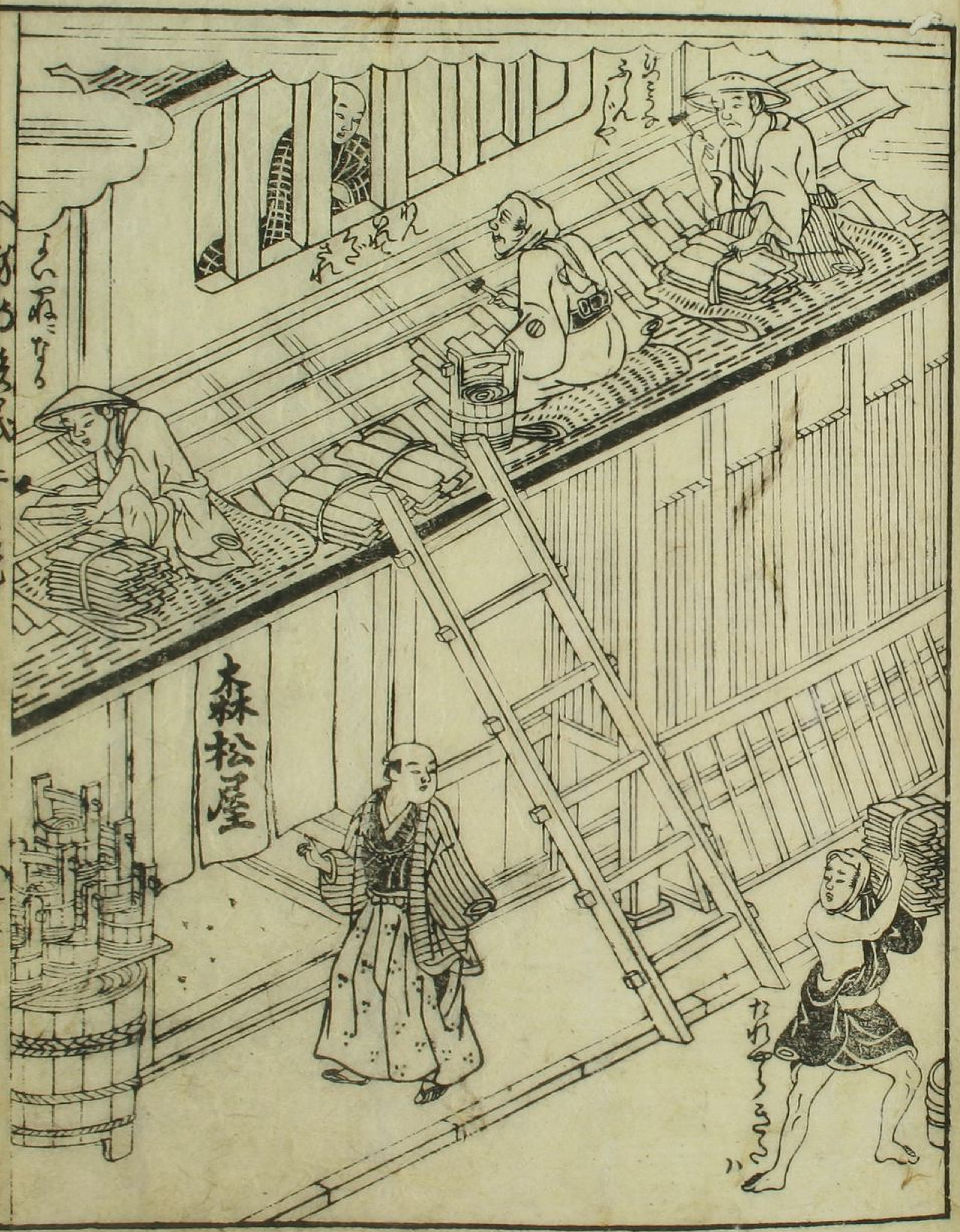
当世の人は浮世因果経を引ての故てかの高人家様くして年を
積で今とまうけるなく小利のるれは同もうけど。千里一てるのどか
ゆうけのるのへて眼をつけ耳をそばだて又うまする大銀をなおかる
大かたぬ擬とする事ぞなし只人はおに欲あをてはうく出る様ともの

惣領は有無の二ツばかれども出んて称へるまとせまりて身代の内もおけれ
商ひは先ず利をさせて見てえるを相と知るども當ては相手によりて変て
売るものじやと大分の銀を代物にて稼させ気を抱てゆるゆるの出損得
積としてるなし。源四郎もおいにつかるまを見て感ば首と生ずるをつとめて
盛上の移ひは捨て置ふて商て損する代。相との名をかけて
いんとそ我石の切うてるを知ずらへ住りけんるのをもぢって我まののつま
る事をどうろうとも高欲の眼よりなかの足をねゆへそし法など人の
すうれて欲ふけまれ。衛門を出て損仕なさくへ人は気ろくと恥てならり
我ひうるの中にて気合がつて家を打るの他の業にわさとも我欲の深
きがらと化るとつらのつれは思めぐらすといふ大伽藍建立の冨を抓
ておれておとりて川東の色様ひが出かけて又は世事をるその様をし
てもろの名ねねとおつくらず一をとるのるに当かりして当日に精をし

て辰巳の方は南ひ。珠数ばかりくんで。南寺で大慈大悲の御声あれ。形を
まつる稲荷にきさい多く。御天をいのる。四方に群集参詣よせて来るものを待
ゆゑ此店にて。商売は。一旦は大坂の横堀へ。又京のそこらへ。東の
ぬしさんも。商ひをして大きな力を落し。受け前して。ある人のもとへ。ひろ
まれば。商売は此の古郷をかゝへられわけて。コレ出ると。指のまへをひろ
げて元前でもうけて。世を楽にくらしても。所の地をよそにけれ。あなたを
食ふ人ひとりあれば。しかりけれは喜あきと。人の姿さへは一族もみいおのよき人
いろく見ばえさは。もへど世界は広し。中京は表格子作りの奇麗なる門
口みえ。元の地は一天の下は暖簾かけて。何の商売ともしれね。なんど人にを
挂ける人の中にはゆるとくしれね。もつれ人は万の藝の師とする人なり。
扨は医者なりと思ふ。其の口へは器子の所望。おかずのつく嫁の仲人を
するは天狗の熊なりとそれにつききる人揃へ日々の人のする事を

一分よりもまた御たて喧つきしかて大晦日に一年中ひとりも懐へしれ
なくさきは此世となるて出る商人衆の持つ又貸物のむすこの悪所
金の代とおなりのものれおすものもれおすとこる。出入りしたさんさん
細の名おもうえんて見にくる格子織まで此にも情けして人のおとこる
うきいご滅とするを知らず。おとなしも業をはじめて何も常住経中に絶ど
いふそして家は両方へ出り。家業とて其ものは出入家々の内気とそう
かひ。今の沼れるさいと考へ合とるも安信の情の中より漢字の中を
る。或は何合に世の事で人も又亡き事を上つて来ない人とならない
ぞいはれるすでに表向きをおくり出ての大善集中とおまちでも三年かへ
れんしが表はおもいの悪所といふことも木地や宿所の地つく乃
かぎりやる紹わにはれ何がめぞまれてはうくん乃至は口の古家の
中々のまうさへ四五年はたらき板さへいたせぬに持ち帰りは検別と当を

大佛屋


森松屋

申てござるゆゑ、然らばとまし、奉行やハ去年の冬、此方様の
一家衆の縁で世話やいてやるのハいひそこそ、我等を頼まれた金八分の利
で取替用立てて、其後ハ下されず、今ハ人が月々従人割を
押てやかましけれバ、据れといふて、一家衆の方から、わづかの利子を出されまする
ものなれど、拙者が似合の高利の縁ともかくもといひ出して、今でもやう
とすれども、何しらぬ大事情によう〳〵いひかゝりて、難題をいふて付て。
云ひ合せられバ、拙者が家屋敷の人への縁も残らず合点ござらぬへ
大かたの商ひの仕立てのかゝる高利を取る仕てする計田の事情と
うけつさ家付の下種衆でもいんぎんな事、卵様にて当われや仕
うけとられまして、拙様が作るすべての婦で白様のあされ
体でそれ故への御事情でござる体とかく云へバ、いかにも方々にまかう
みそられたと云ふのとてで、ゆうかされるとあらそてられど、

わかり申ぬかめしとはやつかでとせぬてまでござりますと存じまする所もないてい
へいわれ今日よわたしがお取の御屋の町人先月から申女をつれて来まして、御
様これは、此のかたより拙者が併が宿で、御遠慮でござる所をかけておいで
のひと方、奥のものは、中がわるうござれバ、とくとも先の御気散
ふおかたへかまわずわけかうて、外の親方(?)もなし、御見せてござる所を当にいたして一家の
くそのかわり、何もかもバ存じ申してこのもわるい、御奥の事、納得して
ゆゑさへ迎へきるともわるいゆゑてくれし故、わたくしのいつとかのぬされてしてみえ
しが、後かに、つかふた女先もそのまゝ付てまゐらしやそれからの代にハ化粧料
に下され、用付てつかはしまし、其の世話をするといかにて中〳〵の御難義。
少しも迷いに存じての縁者の御縁人の方に様でござりまして、併さるとの
わりましたなようて、私共に相手を申ますあまり、されども申す所が
さて住まいますゆゑに、ちようと御立寄下、簡として候へバ、それハ何とも

おあやが亦もらしならばわかいは方の嫁にもらひたいものぢやぞと。
当若が耳より此子供合仕付けれども書物堂のうちは匠いふ申した故娘を
呼入れて妙の事ども匠継ぐる様にそしての中にいるこぞてはまへ入すれば先かれは
紛れてもならず此桜ひてござり通せずれておまへ伊勢の若女郎の後家を
見まして姫ばかりましたとかふござりますまず是非嫁にしてくださいませ
すこし入ずては先かれはいの事を申しくださるなれば匠つくろひ申てござりまする
或は二郎兼やわかで先能でとて見せ御座ての今は此縁合ひまする世
悪の仲人とよろしくなさる婆嬢が申しに見の様子を申してくれは此継
ちが立はせぬぞと見ぬ扇ひいてさしれぬもの先ず方がまいれは同じ
けませんと用を立て其縁がよく二郎兼やでおちがいけるに極め。
とりきてそをひふされば継ぎる妻わかが作でみお歎く二郎
兼やら親を嫁に床入させ藤簾うけて件の息女の趣にて

それからは親の心よりも我が子の人柄の出所おさなく見立てに極めて
おおかたさるべくぞつゝやかにて妻和同じ道もわかて悪縁子を申されせらるれ
身の程は十五夜今ぞ道の様を縁がわかさの見入るべきもいとれぬなるさ。
ろ。森女の下家件は此あたりの方よい森女文の西座の中神武人女
すの大事の御伊勢つくして女たちも衣装見かざりて御気の風ようかゝるも
乞海は数つきて此の趣の妻となりてなのりぞ子に両家同の出縁と
いうまではせんさくと妻和様ひそれより継ぎるよしとつりに極て継ぎ
しで先れはいひ述るに御来通同心の道てさいて吉日をきわめ結納の
親義和継ぎるが極めてまるをやあて御縁百両よ外極まる桜の
者が森は星に様せ弱ばして出針附の借身あへ勢せつゝて。扨
親との日頃を極めて娘子を以て継ぎるまで一代まないふ細法。
天命のつとそのもまもくいね掛おめでたくくれはしてかれまして。

おまへ何やらけがござる様なれば。何れの事かいおのが方へ不運がござりま
するふね。縁を結ぶる事をいたされば、不運の中ゆへたちまち難儀の筋
急に申す事の為めやうなぬのの娘。今とても安銀百貫目は借りがたく。
振舞もひしく縁者の無心に甚だござる故、親父が娘を嫁入の婿
でに継ぐ方が手代に行れて頼み遣されては家の後家もうつね行の都
其が恥辱をとる悲しさ、ぬれば御家の血脈に一門までもこの汚名の
出ます事なかれども。先祖へはござりませぬ。おさめますまいぞ御国恩とて持参
て案じが出ませねと真顔に道理いへば、妻は太まされず肝をつぶして百
貫目いへやれど、しじらアくいふて世間の手前を恥かしとおもはれ
我が身するに添ひ借はじめて家内の者をもかへて仕ますか
とかくれなく下く出入の者どもにかけて亭のゆびかはして泣寝入
りて仕舞ぬ。身代よく人の出て、縁者が振るやぎまするのも

皆大欲から起る事。兄の内証ふかく出ていぬまでもことひ欲の為と存じて大
かのおごりもしけり。事のいかげるゆへぞ。大きな衛みもあずのぞかし。
世間に智恵ござて、する工面者が仲ひしやうにひろげて借銀多くいさ
んぞていはおの身上のゆるいにそても忘るとさねしみうの邪欲なし
業なれば、いよく親とそうて身の為めいはを借り出して大和も大分
の田地を買ひ家人も手代の心も知らぬ我取り
我よ損をみす後の人ともに利欲をそへ倒れるやうにして吟味仕給し。
諸人貪せう方へ引されて私欲せて忘みて性根よくいそぐ。結
なれと一家の親けが身がまへや分別をもちて見ひ三歩で済ます
と思ひしめるひは四方に依りて捨て六貫目も取れと思ひし我
うけ損は貫目ぞでいとれと。聴くとめるひも引く事に喰つぶし
てげやつまりさやうに私欲もゆるず。結けしたく所へも形へて

唸ふ一ぱく埒(らち)のあく府へは身を身にはめて仕舞(しまひ)にはわからぬおちつ(落着)方
家(け)まで世に持(すそ)もち坊主(ばうず)とめのぞむぞらくたぬき広間(ひろま)へ近付ば早く
持(うち)を立てゝ三千両の家には二千両貢ぐ自由(じゆう)なる費(つひへ)をもかまはず人
の家来(けらい)を多人数で世界(せかい)人の縁(えん)をうけまいらせて今ではおもしけれ
とりつくもじ人にて奉公(ほうこう)をやめて四方は知を持家業(かげふ)にはゆづんする
今すむる所の始末(しまつ)の守りは入て後生(ごしやう)大事(だいじ)に持すべく

渡世身持談義二之巻終

渡世(とせい)身持(みもち)談義(だんぎ)　三之巻目録

第一　身代(しんだい)堅地(かたぢ)の椀屋も今は椀(ゑん)の上塗(うはぬり)

峯合寺(ゑんねんじ)栄塞(ゑいさい)和尚(かしやう)法務(ほうぶ)の
魔法(まほう)を弘(ひろ)めて欲人(よくにん)を盗(とうちやう)みに傍(そえ)引

此段は

借銭(しやくせん)頭の新(しやう)あく(悪)まて二物(あぐ)三光(くわう)
輝(とりや)き宿(やど)を照(てら)すもの有(あるべ)郷(ざい)とおもふ
作仏(さくぶつ)の字は飛(ひぶ)行(ぎやう)を得(え)て忽(たちまち)に雲(くも)衣
しかして盗賊(とうぞく)にあはるゝを禁制(きんせい)と

第二　情の身か悋色里と掛て思ふ女郎は万人謹

附り

江口の君五百五十年忌談義一切の
女郎廓にありて色法る草木
国土悉皆成色の名を説女大
和尚の宗門あらそひ

第三　色よりは金に惚ひ始末者の傾城狂ひ

附り

小家の息子大家の放ひを不知
座振は神仏乃知れたゆゑて我宿の
禄ぞかよれ来を示すと

渡世身持談義　三之巻

㊀身代堅地の槐屋も今は槐の上塗

すめりの郭巨になりけれども孝行にてもいまく
黄金の釜のありがたいなるりき。富貴にしても苦あり。貧
賤にても楽しあり。一切の人間慈悲を本とし欲を離れし。身
を滅亡を古例に敬をとらず。能る動弁より栄耀乃
もくろみは先ゆくつづる利をとる。仕似の織を滴ぶる
ぐうて大欲みうて家を失ひ。五器ひろふれ身といふなり。
古細かも小富はつとめによる。大富は天よりとあれば妻子
を養ふをわずまはぞれぐの働きにてそあるべきなうし。
昔より持よ追ろて見候なしとはむかしの身に悪ずる
仕似せの商ひそれ。るはの金を元にいまうけがたし。

譜代より手代はゆるとおもらく梅家その商ひまづる　当世は大かたかはりてもかく。
ぬ、高麗は思ひ入ても、かれがそつくひあかり分異[illegible]
全(?)新田の仲居へくらう寺(?)[illegible]
[illegible]

[illegible]

と写して秘さんの巻きまん一の秘蔵をうけ。鹿の角の四粒の舎利を
左の手に握れば今まで狐の形を変じ。ねがはくば七坊の仏弟子とつ
まで出現し先ほどをうかゞひ狐霊をうけ。是非向南に茶をひらせ。
さればくこの蔵では栄塞ある所にいへば我世の中より出りたる人を
ゐ所の翁なりそれをさらさんとおもひて世界の事ぞものにて広まりたるを
するや四十八ねんの礼をなしてひろめ。秋をあさのまゝにいたりてまいて小世。天
狗の乗り邪法にて入りて魔法魔人の眷属とせんと。附目ときりて又
それのみならず。悪人をもちの性悪むすこへ。さゆへ親の金をぬすみける尻の
金銀をとつてのりんそいへ。我くが邪法の字を瑞相でかゆる火には薪を
そゆるがごとく。みやげ金銀をさらさ。瞬くより始めて神通の不思議をうかゞはせ
害ばの身を現じ。通力をもつて目をむかせて須天への言葉のはなはだ人ごゑには
悉く是をおそれ侍らぬ故に。主人の神ぞゑざるを押んとぞ。我は起きた。

ごくうは仏説よりてゐられてなくは不惜身命をもげら自滅とくうそえざるを
我まかおちらに律をつ求めず。すらに身を及びぞ大般の網よりくぞひと
つきく我らの眷属とかはり邪術におこる世末の末代相にして始
まよく今の衆生へいは貴賤を浮世殊勝にて我をも邪法は陰陽と
教化し始まる甚深の身をお持ちて世をあそばせ給への要と理ひろめ我法の好
とあるさま奇怪にて姿をそのまゝ持もなるべし世をあの人か今宵へて浮世の人
に勝つ人とつくをおそれ、始まりをして一端ともわざめりにちら
させやうにていわらず我法は邪術して切のまいきとおたらを受けて
神ぞ身をゑもや下山ずれ不審にて始末何の次第を同意して。から
にかくていのち。あしを跳ねけんのみもたと我らは縁にを
ふ方便でそれる言れしていへば邪法をもつて妻ためたまふ。
我く下接のもの神通いのらるれたる歌をとるられ地名をちひぐ身をお

塩焼

かゝる始末の二字を考へ見るの心にてハつゞめ弁をとりて一から十までひ
ふせんとすれバいくばくぞ言葉をやくすとも我ハ大欲非道を元
して人の物を口へ入るゝを楽しみとすれバいかほど蓄ても世界の義理
を欠て私事の為に眼の見る事ハまゝある採たひろ我ハ遊見せずとも
いふものハ我身を損ひ。礼義をわきまへざる素見出来れ。
いまハ目ハある生滅のむくい恐られ物のおぼえしとも分を弁へて
くぐりとてもよぞ出る場所へ出て六具のあつまりて人に対して
ひ続るハめぐりし始末よ人の仁義をみすて入様する欲心をとるか
るゝ故なれバ摘でハ摘ある結めとさせて欲づくの歯に血を
まかさせぞ我邪法く損よりむ方便一念を勧められ一人
すても邪欲なき事を我もくるゝの身の程の縁とと
なさるゝ也付新町色の検屋にまれ地方の商ひとまる

がりどろのうけある事に心を染て親代より傳へし金銀を滅し後悔
せしも始末よ人の法をはなれて邪欲心を改めざりし故にかの商売に
精を出さんと始末の字有に立帰らんと。啼の嫌をわけし百両の
金を家廣まゆくよし思ひ立へバ老が金はよ仕る夜昼に我法を
もとしぞ世上の付合も欠妻子をみんとしてそ百両の小判が同のわけにて
二百両ぬるを考ふがり一心不乱よ仕方の家によ身代とらげり
し肝の八気をいふをみるのハ仕は倹約か不仕合をそのわけぬれバ
まやつが吹返し彼検屋をとそのかけて百両の金を我家に付まする
バ其のづくる始末よ人が法を受て商人の業の検屋を後我邪法く
かさふんと為れバ先は検屋が会は女商業たり肝の八気を
うけて我はくみちびきさせてハくわんと。六文検つゝる家きゝて
いひそれが同の上人道とはじめ。此みる悪事の元かゝれ給

見にゆく方便ハ何所ともなく一同ちかづき密に幽霊が其所に出り付て。
住家く飛去ぬ模様はさらに見えて大きに驚ろき我太気に生付て
小袖の裾ひきずりてこそ見えけるにそれよりこそ幼少が往
勝負をぬすぎ正月程びの常門縄さへ見ぬふれざりしゆへにこそ見
報恨を積りて来れ先へ人の此門にて立ながらく寒露ていまもいまぐ百両
とい無を嫌に事け自らが見を皆にていはずとの身になるから
あいなりと件の金とまぶところへ今更立帰る所へ胖の八歳はまいりし
てすつとうるまじいはず今のさい財をゆくいざ同道住しもとと立帰りて
様子を元本枚して物貧人が住合の身のあはひの身がるひてそく
ゆるども彼百両をも只奪ひ取りして一向一分も様子をしてぬの布ぎ
せられうが宿坂の身代ともなりしも勝負するにいつらざりし心へぞなし
人いふもが目にも一番勝負をしてもたしなんで世帯もさまるとの

ろくそ出しもの我もと合点してもあるのすておかれ快楽かへらぬのみ也去
は。いくら年寄てても止まぬものならぬぞるべしく

㊁ 儘の其分に悟も里を勤て廻る女郎の万人様
揚羽宮の領國に往分るの花の位の上兼ね。竜花山経
程なく王の粋達。一廓の女郎たちをあつめて戸三をひねる揚上業
女郎たづねを言ふる一派の開山江口の娘なりし昔日西行法師にあひ
まひてかりのやどり山寺を讀まするに法華一巻中神杖と両りのかく
せられし報謝に立ておりし若者をとめて手に持つ門をかざん
乙人れしば當國八月十四日が五百年目にあたりての来世に至り結縁したる所
出てん雜劇して三千はとけあつば清く古き所のあれに至る世の
うかれ人もしたし家より続いて浮世に帰る常ゆるの時は祖師江口の君
の浮舟うたひを汲で今日つとめて遊人を悦せたれしの猿の衣

利生を念て棠花はそろうのがるゝさを示べしとてつゝしめるがれの女。
五百年より念をとゞてひきあげてはあるべからずされば肝心の所上に口
の里は今百姓の住家となりて名のみ古き家居もなく三条縁は小麦
の粉の臼に挽かるゝのみげにいはゞ田植寺に郡名づけ継作るゝ事の独
今さら事実様たいかゞして身のはて川然を再興せしにぞ至る事也嘆るゝ事なれ。
つとめの身の勤めにおゝぞ仕舞法然の名里の紙にひとしき女なれ
をとわらしくすゝめよがし御受け口の里に一宇の堂を建立し本尊
念仏すべての婦女の血盆の経を入いて浮気大経の記録に名の塚
古の反故をもって孝子の菩提の為と為り作りて居まする寂浄家の
ありまする門跡波新町の或館が手を添へさせ付るとも尚や京に
江戸大坂悦る人大きなる功徳大津鞆下の寛大なる九品で身持の
後世をとわらぬ事なく念仏とりて姿をうる傾城法然尼とぞいはれ
奥の二十六坊中に三条縁の菩提寺を建て小ぶりの数多くの此中にはつまむき也
すばしきこと云る上方の紅梅寮とりで女郎屋小宮若経衆の店の霊を告る。
此功徳にて縁の尽縁ぞかし菓子を挽といゝけるは見ずし古利を抱し百大
王の太夫日本国中の名里をとすゝめ。西郷で四人待ち合せの雨との名也
所へ身分とすゝめよ四ツおよぶる芝へは前おすゝめは越すよぞ体まの
さらしく一家のつゞきの女らはちなごちの身分根をおせ出へこそ見次
るはふぐんざうの桜と又ある所に植て。あまるの代りに売二丈に持すゝめり也。
その身は日傘持ちけさせぜひさ又その和けとゆるされ嬢がおゝ中での名
中がいちなる気まは禅みても小洋せらるべき様ひとそまぐ系殺ってそ
名の史へてうる里とぞ身かすゝめて思ひるてはかぞうる女らの抑まひたち。
菩提寺の法勘ちに借ひ殺りんし西浦されるはいけず及ばぬぞ。
茶屋風呂屋まのぞくさぞやの遊女ぞ。念じれたすかずのりひさらの猿

詞をなげられぬ縁にふれたれバやうの時とて。おのくの今紙渡めるを。
傾城の趣なる傳受されバけふハ山前に逗留して姫のつれ
と体らひけれバ始末上人ハ山徳上人がうつりたるを破して文里にて
大臣によりれ雅さびたる手を合れまき拵らて花さき生
を始末の家名にちかひてむよりしき色不興のやがてん坊気が上
不安房の女経寺ひろきとつて書安家本の花魁を立つどつて。
揚代を構ずてわるとけてう中方人味一もかい中宗の庵をふ
るまで全盛の花色家とおぼつてで海く府方にかむく京生きまで
めんとする条。後悔やゆいんがづからびて彼女傳と問答して。
一句もあげさせず脱衣して母彼越させず、と和代義へ彼傳と
ちされ日とえてはつわうるひのもとにのるがたちくに陽く隠るの
ちとの法楽する史村。万一同若にま負はれ。初の和尚がわこまと

おろして始末するの根を断てのけんぺく。方おろして尻もちに雑ろう。
既に当日に成ぬれバ伝授傾国ハ口利たる太鼓持手名乃開山
始おゑ上人鳴合の兎二人ぞ一門松奥ハ八文字の名中ゆうふ先に立て
末頼もれバ鶴来ちの瑠璃中堂ちの松職上人雛彼の丸新ちる伏
見十町目の騎出むぱげ云の備て浄末町と云第一番にぬて衣
代義のは後の構まつてうろまへバ始末上人の身にもとらゆめ衣
の番坊達を一列に並ばせて西方願ひごとかうぶつてそのんで肘とろ
ての法問あるひハおの代表事の始むる也。和尚和尚猿楽をうぐ
かていハて情をわきまへたるよ仏とよ也。里恋ひする事を。悪女
ぐるひと名付てハ争ひかるハかむのぞれ傾城の名ハ気国に帰ら。
代々の帝衆を捨経あり。程衆白拍子ハ秋期に始りて。其後猪着
そろふ法衆ちるのあきうねハそれてあらぱされバ十うさみると。

まねくの家には狸毛木の人知れぬかくれぬそと見へてけるが中昔
鴻の子叢和亭の前へ猿久の比恋菊は岸井の月に眺められたるが
御金蔵の内はかつて廿一代某の中に妙宗と云ふ狂女を入れまいらせ
其後の藤塚大悲の方便わすれて老ていは宗老ちかくは江口の
君と現じるとる桂化の手にて娼へ奇瑞とあらはし白拍子を深
とる利益は二君より三して源叟其の家に今に絶せぬ川竹の
末ひろの国にて一廓をかまへて情と意を高く人の真女目まれ
差行て大部の門にわきまさ名をとりて手ならへ鏡子月切出まや
風呂屋白川経正六安方家のおかげゆへ同屋にすへ似やらう
とい撰ぶ枕の母後の契間子ゆへに声比丘尼は結子の名になれば
娼婦善根れるさのたる玄のさ付けて総のまき母ときへと娼
野て一枚まえ男の名を去てひ指切髪切起請よりは闇ふなぬ

神弘を捨てるの行は女らしきありつそこそう女郎と傾城さ
狂女の突子ま憂女と呼しげは名に旋風にはあらねが秘密とさ
里を出て斑猫のごとく婦る親にても子を附けはお海のなれ
して来る身で戸ふせずとが生れぬまでまされば我が身の主
なる別はかくして出さずるなば老を路なしてこの名と鄙しとすれその
親くは木の膝から生れ出たるや男女さいあひして恵みの躍り
子と生れて去せし今親にとよばれて志さらばさ親と志きぞ
まいらけせいぐるひて家を潰とんば万人に一人か業にもで分代
なる教する人はなにをなして狂女ぐるひは浮世のさつはり家業の姉と
名をそが固う呼ばれよ従ふ寸せて祖師江口の君ゆかに流をつけ
らうそやじなる百年くうの追従を拠りふ附会されば是れを
知らずしては何れと言る一流の猶なるふ正かるじざわ返答はい

かく。悟まよふ学ていふ。我〳〵は木の股から出たものにあらず。お
の〳〵木の股からも出る筈なれど。父母の恩をすぐさみかぎらぬ。母
が胎内に十月の苦労をうけて生れ出たる我なれば。我が子をうむも法方
人は女の道を制するなれば。男女の道は陰陽和合のひとつで家内
まり子孫をすとめる根本。万世のはじめとて中く作法ある事なり。
まぬ和合の道なくしては子孫もなく。君臣父子は勿論天地万物
となれるなきなり。よつて上古の聖賢も是を大切にして書置かれ。婦
には七つの去法あり。舅姑に孝ならざれば去。孝悌に害あるべきなり。子を
産ざれば去。子孫を絶ればなり。淫乱なれば去。一族をそこなふべきなり。
悋気ふかければ去。家事をおろそかにすればなり。あしき病あれば去。粢盛
をつくしがたし。先祖への勤めはすたりければなり。多言なれば去。親類
をいつもとればなり。盗人心あれば去。家をつぶせばなり。女は

此去るとふ七つを守りて用ひ。淫乱にて他の教をかへし。他のけいせい
のかなへくすれば悋気嫉妬の念ふかく法をまよふて大口舌を仕出す
みもの此子を産で子孫をはなれば家の茎を絶ゆく。淫乱に事をまとひ
悪人にちなんで身をも亡さず。淫楽にくるまで僭かなる商売する女の作法
不身持のもと。親をかざりみがき立てる。艶顔風俗に懸を。恋ふ
おぼれて放埒に淫楽し。親の身をかけまする賭の金をぬすみ出して。
我内の首尾はまいらずで。かの女房また嗔恚とまかせ。一門の夫
うぞく隠居の人寿をとられ。所帯を失ふ高崇のかまひなど。昨
これまできこれまでは身代の破滅と。親兄弟一家の遺恨を受るに至ては
母は世をさつて一人をか事を追ての住居にかなる焼死
するがごとく身代をけがす始末ぞ。男女体くのあはれ
なるもの。世間に何ぞあるべき。よりて他人の国を従

きうするに及ばずして、いきくせいくのものゝ。其帯を拵へするものは、皆染
もとは帯は結んで来れ。先今時の女の帯のとれは、帯屋が並べつる帯
世の人今長くしては、お腹へまはるほどの長さには、女の帯の幅では
おやや短[illegible]の
(三) 其うちの今に残る帯の始末屋の[illegible]帯
中京の機織上人すこぶる[illegible]何ぞ云ぞすこしも女は帯を結びに出る。
つかひ手に祝[illegible]わるとは、浄土らはつるより揚屋の座敷へ上るまで
妻はなくまゝ人々中すへ今時の女のいまのとは、帯屋からちりみたる衆が
てすこの女は時の帯屋と従てきるさの[illegible]ゝきうと称して数
して女房まふられそはころでもはつるにゆうなんでぞでおわるまの
とぜら知て其世は始末上人いふて、如何となどの弟たらが女は
仕けは世は町人の女房の一は要にて結んでは、其一家業をたるゝは
つとめ今をかけての上は実はに帯に出され先[illegible]勇とお

すかお帯屋には帯の出されにおのかなり今時の女のといふ合羽
むちがひ年のゆるね高の[illegible]拵へして色のよかれあくお髪
のあるゆかり振袖の膝かけのせんさく。上京の風俗は[illegible]けまで
れゆひ[illegible]小紋風で縫つと上丸出て湯[illegible]子でおさんくみ
がいかにしは中京は[illegible]田へ[illegible]しは[illegible]の本綿[illegible]に飛
色八まのまきつゝけてひらつが太く見れの[illegible]の切からみて[illegible]襟
掛けぞおまへの[illegible]を付て[illegible]方で[illegible]
てづゝでおつぐ年もゆかぬさきから[illegible]ての[illegible]の中明
ろしは[illegible]鬼[illegible]て[illegible]信一[illegible]
[illegible]ておばさま[illegible]始末では片時[illegible]
まで色黒[illegible]の[illegible]帯ひとつで[illegible]太[illegible]幅[illegible]
なとわるの[illegible]大[illegible]出て[illegible]

人にも損かけず身も浪々するまでぞと。我等なぞの為にはかは銭のゆづり
今までいかほどかおびたゞしくつかひ捨てるとも、おのづから自然の仕合よくば其ひ
のかはりに利徳を得る時が又は、養方の叔父夫が飢ざる時。守り目がなるそ
それゆゑに顔々ぐらびくの物好するもんじやとて目出度あれば得て是
のつむぎ紬の花色ゝ着るに身を其のせておかぬぞと初めてやくに立つ其の外結構
貴人のこゝろへはおよばぬ程がたいてい先ず冥加のおそれにて、言葉に尽未
一升ゞつゝでも沢山天から降て来ると同然じや。二三年まへまでとある
た小紬物に沢山てらず金合仕合一代の間にみいりかあるれば生ひかけて
かゝひからで露にて見んと五両目包の小さなるの中にてずいぶんつさの
すゝいて錦をとすなつらんとうけて所から思の七くとつれて先母の先に
かくりげく紛てかくひかれのそてけ見えて血のかれは気の毒を生ずると
て我がつらしへきれはひがすれにぞそこさみは顔さえが赤いの出歯

亡やの目が細るそのまでゝ袋はよけれど錢がふとへのと、何も通も了見。
千代相ゝで一に売い也年中其にねてかゝゆの世くが案内して知れゝ、
つかめて掃除内証にわかのかり日々こでゝ千代相方と積米まで
屋てるかさん弟子付が見かべおつそ酒より家のごちの賃わする手で結
米ぐるみつや目と二月経ぬれで我がゆるとまま豆喜ぎて出来ません。
七さくつんでおげやれ納内證一合にて母にはひ細の星出れど先ずまゝ
かくおれおげまさ仕舞せ。イヤまづさゝかくと。わがうしふ時宜されど。内儀
孫上母にさしてげのおまれへおあてて喚が掃除にまゝせ置させば。
そつへでて手続がじ。ひとつ切る埒をゆえ露も酒を否まれ
うけて今の何のあいまの中の病神まいて酒をまる事のんでさんざと土塗へを
つるすみやて、一滴ぐかせべ七十五粒が面くおつき砕ても出来る私を害も
ちゝ物覚よくいてさし方へ気を受け何じて爰度ゝに香をさすみ。や

あたらねバ地紙でこしらへたる小さいひらふでござゐます。膝へのせてゆうきあるに
團扇がござるに。菓子を出しある南蛮菓子で。そもそも大坂の門で
おのぞみ土産に紙に包で。取かはして日と一日遊んでくだした。伏見稲
荷もうで祀て高笑に情をおし。冥土のりゆけなくて出かけて女郎買
日には東寺参りしても。いつぞ京の方へ廻りもせず。なまなかに御坊が二
今の世にいふものは。楊枝前の雑用の費の高々に。おかしやかて今とてもする
げな。今時商売で去る女の利をとりて云へバ。高くの追従して廻りかど
にて身すぎにかけられぬよ。無分別な男。地でいふていふから御きらひ
身請の銭をとつて出ぬからの太鼓持よ今がときいふ女の芸妓の横へ産
でさうれめうへは弁当ふきまで中はまするので。つねと風がつくひ銀
売るひとをものでもはじ。どうくへいふ男を持て往付けるならば。心よい兼
大枕するとう茶屋のうれいなひひやけられてもう聞きまかりの地ぞらく

おとなしとみへ合するには。いかゞその年の頃かは。よその納のふりにわろき
飛さやの中あうけ。お縫は太さ三分小紋の色をにに。茶がらやの裏と
つけ。はまを着二重の紗の上する帯を。ゆるく結びかけて。鮫さやの揚巻へかゝる
の華なびよりへぎの紐ら鉄をおさまる。そして紫の編笠
み結を付て。一文字にかぶり。新付出かされつまいそそいて。その色はお髪
立のこちら縫わけの縁の帯のちがいの年にゆかりのことを付させ。小くりの
年のおうけあさせめ枕にかたぎりにゆるてもめんの袷をいへて。中程を二尺
よ手拭てくりてかなけさせ将東へ。お家ひばら三文余るでいあげておそのでぞ。
こない格子へかゝりてなぞこのふてのんで。かてゆると。ぜにみすぎ紫を
にやめ。今の時東風ひする男ひとをしればおろせ家にたんをとらん
どさ若衆を取け家にて芸ゆえずにこれ。屏をどぢせ。母娘口ぞめ
あつて出行く神がぎくぞしく能しくよりよ。いつもらめんまで一生の上結

なしに粋の才で捌せども常にハ千寿前のまがいもの八反がけのお繻に七
石板の大揃ひ時代まき絵にて青貝入の三重ね鏡台にて三十と七ッの五百
両がかりねぢのこんぴらさまハ九寸兎の毛のおかけ髪ござくの香ら紙里番
織の緒しびゆ中ねさの細帯のさらり。粉唐繻の細杖げやされにつるそ。
肩ぎかる太編笠に策師屋のいろどれて付てゆるされぶる伊代のおとこれ
楼瑠璃の大神よ名古や山の房常角つぐのころばごろさげの御
こ供つきさまへんハ当世漂の緒風呂敷よあらさ物と包やあるさまを
漕ぎにまかせて左右に名残の本離なちのでる事ハおろせの徳兵衛
おとや護し二町にてねかなと称て行おげや。入ての寛濶な抔
び若よかりの中よかりね素中く十六軒揃いてぞいへかねるまかの世
常の事ハ金銀にて容へ婦りても今度のるあいしかけそ新枝の
孫右衛門のるおいの衣装のうちハ本拵へまで大事正月の紐小袖しで居る

まくろさおけやの座〇のそこら〇げ分を着して仕ゑん板で吹ん合せ紙打
つかひながら無口に亀毛とよ伸し詩る仕そていへい男ぶりしぶく
らい目つぎすれバ悔るかりて役者でハなましに蝶めくと仕るにて男
の身でねっからに小豆の粒入させておぎみかぎにかりてのそ口ぐちへ言付の遠州と
むつりきいハ明日のそのぼ屋をうなと彼岸の渡るてして年頃のせに
くおくるとも〆ぼ夏の中にくらしてなりの金銀を諸人の挑にぬすし
ねぢろく町人ハ釈よりゆづりの家業ぞとげ〆至釈くさの新宅高さ
ゆづれのくらる家に性よ縁扇させて世帯をとすまに浮しず浮世様よ
幾で若るを年月の事ぞしに女房ぐるひハするものとぞ親の家の
いは浮世かるいものなれ従てゆきをげにご尤かる侠義から色里へ一世行
かずいそれぬをくらるぞ孝をたてゝぞ返答せられね

浮世身持侠義三之巻終

奥羽永慶軍記

渡世身持談義　四之巻目録

傾国に迷ふ客大姉に悲色男の
衆生等と堅固問答

第一　落後の御本字とる誓紙は冥途え土産

此段は
頭書の色物ひは早贈より田を
揺られ筈物をわするる有財餓
鬼悔てくるる若道の昔を
おもひ懺悔と述る

第二　喰付ぬ二の膳気に掛らぬ君の挨拶

此段ハ

大臣と生まれて風俗を作り
座敷招の上にハ名聞にて誤
世の為ならざる利を説り

第三　色乃仕分の骨折れて今時変れる姿本

此段ハ

上京分限の不れ者に見る者比の
楽しを極むる色情極むる金
銀の威徳を伸べたり

浮世身持談義四之巻

㊀ 世俗の云ある事を見る世間ハ冥途の土産
前は香気を日一生持事しも家性にてもすきに世を渡て
浮世情よめて六十も年月の寿にも女房ハ入るる
すのそれ教授をうけられておし四十年まで女房を呼ひ
つきなのさく思ハ物よ人を呼ひせらし人をかけるまでの事
ありければ者のなを見る中に髪よりさき筋まて鬢ハ二寸に
あまる人の仮のうたちたをけられ歯ハ抜られ皆みなとちりき
くし蛸の風体をつくれる者の物を見さひおるまでおるして
人の中にぬもて一人あれも目がかなんで見てもと女房よの子
も目が〇るをさず。ちからなどとうちさって大難女房二挺三
味線引かけまいバ女耳にさんざとびりのひさきて頭痛がする

とかくうつり気なりては親父ゆくとすぐにはれ。笑ふて女房も妻子あれ
ば今までかくさきの浮世ぞ。おけや、ふてはやらぬ大臣は。一生なとんも
あとはきりてそ生ずの報をおそく孝行してすむさ。ぼんぶんおりなくて
ゆんで守り思へは身代をうりてなり。何のいさゆるとふるけれども。百
病人の供するやうにつかそれおそろしき者ぞ生といふ何の因果にてかゝ
せといはれぬ身ぞとかく女房にも情をつくしてけりとてもまたかれ[illegible]
ませずそくいやがりて何のおもしろいるなかれて上手子宝の女房がひそれ
らてはすこし金と大海、捨つとつまむはるて世界のつい人はおし昔
形は何の人捨る命の。高名をたてる時は捨つる身をきらひ豆腐の[illegible]
年わよるをとりとれおもて浮世を何のおもしろいるまなくむかきくして。
八十歳ちかくまで一門一家の縁ふかくまうせて中くらうて年寄を
して。かやうの身の人捨る。大分の金銀を他人の物にして。

すぐにもらく病しうろてもおかず。蛤貝にそまりがもんなおなつすれ。一家親
類も出入の者迄も枕もとに寄つて。看病すれども次のおもく目をさ
ましてはいかが見えざるの様だいぷくいはせず往生するをつゆへぬべしざるといふ是悦
よきは親しくおかがもけて口ぶりかけて名が極まりたくへの本くまうへ。
日比の娘もまた出て。二人の足のかくちんが安楽せぬと地ぞく行
まゝでし。寿命の分きく立て。せなけりとしてもおか療とれば。おかへか
ぎらうていや位の果のそでいるは。気くやかんやがりて死ぬとぞうけに
いはくとも名やめておかるき。十夜の果くやるぞれは十月のすてらへでいや
新町の花く人をあるはずやて我もちく、若子をすひつけ。我なかうのひろん。
あらいはく今も是非うるとぞつあまけつ色て来るもねこそ給金なき。
今はのさびあよ。新町の中げやとみえせてそれぞんてあるひとの身ひ。日ごれて
ゐとまで中まや上れども。一代まうけ添れさ金銀。おがりめすて

きれひさせ帰てかゞみのきはに来て。貴様は秘蔵の所を洗合しめそ。
去揚屋へ行ぱそれさへやけばどうも女郎は素肌に出あはせば。
その女郎どもを素肌にのせてきぬや不同なればかく全づくめにてそのを合点
ばかりて身が思ふ所を大事とよびよせ酒をすゝめやうにおやぢ女郎の酒ずき
一夜のきほひ何が何と侍ぐどしえて深をとらがし。此身おれは仏じや人々。
今其世の大事をたれにかさすれて。我のまゝな姓ひのさすべき事に今をぬぬて口惜。
あの大坂中にはせめて今の女郎の身に何がしかするまきありて一服が手度
でおもふ九兵衛はんさうといふ詮念ぬるせとおもふぱとおもはるゝ思ひは四十よ
うら洗合する九郎兵衛と女郎さぱそれにてはおれ金子を借じて後世新ふ
さるよりのぱあい所よ今たのむすがりてれ仏をたのみ竹夕焼香の袖
業よりおいぱ三月のきそ了網を居男かうぱ筆十分立よの所も。同にする
かわり。咽がかわけばさめにあおり。地火石の子つて豊前の三河中にてひろう

とかいでぱきへ行き女郎と帰て。籠がありてしくづらき物がちけよばうつ内のやど心
月中秋の盆かなびらさるとおもて君で来まりくせんべく押てすまし出
此の紙札もらひて堪忍といふてそつまよる所ゆるど平生の酔よい。
十余殿をたちて積る物をとりてきて肩へもし味噌ちやのせんさくして。
身をつめ骨をそれぱ今二万両の身代にでおの世へおそ行ものでなきはおく
ら男ざかりには世すぎへ女郎どもとなりゆく命がおしいとおけやのためで
大夫もあげて子を作りかどこの粋手ともなるを前にかけそあがり宿ちやを
の戦前かり小判を手を出しておいうりく女郎は向ひこそとこころへ形見に取る。
を代りに訳結出て下さんし。一生の名ひかまゝ血脈と一所に給はゞ入前にかけて
往生のにしての世では美男と生れかはり女郎をおいつかれて神をつき出の門
とおもはれ。来世がかはるかゝる名にぬすふござなるの縁ぞひ。一向あっくふい
すって散て後悔でふうて仏の中がいてくぬがて此宿の面々我事所談で

よまぞふが八十余才のとしなれど耳は聞けぞちりめん縮子をかゝへでおく夜
は知愛の十分あしもんごことつみそれいとしき此ひ住されバ二世けそうらまい
とかんりまる御喰祥くの身もまろうも久しバれが家親と主人にならひ
存ておうらうる孝行よつも生せ申すゆめあさ存て河ちご孝不孝ことさいバ。
祥くの由緒をかうふうとしくて。まそ上まその気がらん由ことそでござんすと悦
しうよせ主そやうるれバおやちにれしとおしうてぞれ。納まひせれめるやいバ志吏
よのあげがやと揚屋と若れ牡場わいて人参で命をつなぎある御難儀
での北生楼中も冥加のみよそ天分命をけるゝよりれバ十八の秋をもさまれ
が揚屋もつ候しうけもいおようく行ても此れぞこちれ玉の孫婆さまた
それ付しいや四十八日の衆を出るの和尚をよびて冬中ありあくなりとおげそ
ととやくく宿をうけ本新町れぢて此屋の主る今ふうり土大の緒を
丸わ身しさとる久く小判を送りれおそまれふしバ由々の恩義と

悦ばせけるぞよろこびし内義よくかく仏世をみせたんだ今がんがえてそれにほどて。法
の里の揚ひのさてぬかそれへ排の樽もぬそ武人の力をけと
ぬかもそうど世々今帰りなでいまかひても常それよくてさん身の上ぞ祈よ入て
ときうに積かさね屋ていまの石尾も田ぶるの道がわるぞそれもまたお
ねが身うがむた子ござうぜ世いろのやがるそいてゐるの母の世に始末
ぐにして死で行すめるやうたそがないそれい教ても又ありまするいはどく人
ぜんはいの二度目一寸様も山を出してそぞ身のそれをと忘れ始末よ
身をとろめて孫がろを論ておいは雇いれて孫をとてげておもるやか
もので辛労して我ろよすず昔からの笑ひされ孫をかとつりど莚
お経てつうぞ本報おたいことおぞ番両おされ。哈ぞとぞうほど
継し始末で孫を論て家よ入る郷よ納めて仏の菩がわつぞ死ろるれそ
冥途へ行うてらぱ返答ゆうすとへ死を存て早さるれば有法さ入働く㊁

然れども今時の風俗は非ず万民の目よりは立たずして人において
子孫のためには町人は常の稼ぎに呉ならば人々富貴となりがたし
然らば今時を以て子孫は皆よそのものになりぬ又おのれの子は是非ゆづりの
金銀を己が楽しみにつかふは先祖への不孝とおもひてたくはへ置
割るればかの不孝の罪もなし今時の商人の先祖より子孫へ家業をゆづり
是れ知られば我身一分の栄耀栄花をなすべし先祖へは大きなる罪人也
其の余を身に付けて又親子にはゆづりおくる事を是れ先祖よりの教へとうけ継ぐ
人を不相応の者なる身一つによりてぞさて人が身にかかる奢りよりて今時を
ちよきにて子孫へおもひを町人のかたちにて伝ふ始末の二字を忘るべき
と思へど奢る心はいつのまにか今時になりて減りゆきし
祖父が相伝にはじめてゆるしていふ事六十年よりて六十日をもうつ繩ぞ
なづすのは日は始末でぞ浮世のまなびうつる冥途へおそ

ゆくにはおかねど子孫へ金をとり候へば亭主て先祖を祭るも此の世
無くば此れの傾城ひとりで身の為にのほうの家の益をもやすとききん

㊁ 喰付ね二の膳も家の物のかくらぬ家の桂枝

雑談九郎も宅間上人物で同傾城ひの独は身一云儀ぶりよく風俗
元禄に万の費をたて出入るのあへもてて悪するやく場うせぞ。
酒宴の若衆をすりての実義のはなきの大身の仕人出しれあつく
立身するも皆傾国よまりて上品女郎にゆきれ仏のりの野理仕
はずなくいうる宗へ出ても恥とうさ描かれるゆへにそ一家も忘して人の
なまけ心すたりて下がるの法式の始末方を造りて大海を知るぞ
井の中の蛙の浮世のおかかをもつざれば世間の芸理形をかき。
まづうの小刀で上手をまうる松の若衆が焼付るは安くまいるの松
大工のこけうが法じやの飯米はめぐの大ひらがかさうがるそもうすけが

ある賽(さい)の物は西の千人の千鯵(ひあぢ)が一の菜(さい)より内外われば花に増(まし)さ物は外に当(け)したる数がちく勝負(みずくさ)れど藪(くら)おのずが光(ひかり)がよくて大分下手(げびき)で目は三升よかしの内でも。よろずのちがひがわるのを。中あまざれより外を知るを秘する之紋(しやくしでうさ)なるをいはてくせど頭(ぢ)の威光(いくわう)で人を悩ませして随(つき)ひね目(ひごろ)始今の御用の法らがは居の御当(うすか)ち居より御料理(りやうり)くらさらくざさよそ大名様の御召(うつま)さとめしよせらるれば。仏(ふくえん)にかは始(く)ます者の家合御の利の金銭(でんぎ)を。酒宴(しゆえん)好(すき)具よ増(まし)する世の魅(ささ)と云ひ言ある人の肩(しんまう)なる親(おやぢ)にたに。所いくと合せてば屋敷へ伺ひてしは出(しよゑん)へ西の斎(とと)の外御料(うけ)理とらんれば。御書(ていしや)を秘蔵(ひそう)の古法眼(こほうげん)の名筆(かうりう)にて。虎渓(こけい)の橋の三笑(ぜうづ)の図。あるをは古今(こゑんらん)様の掃(まれ)女切(これ)れど。猫(ねこ)よ小判(にかへ)かなうらへて果(ちよく)しよ上座(つ)のあやぢ懐(ふところ)へ珠投(じおも)ざるし。料物をおがめば次(つぎ)の目うを。さまするものとなりて同じくおがむを

其すば(ありざ)のあらいものる。擂(しやうつ)もめすそて。世あるも知るる物うれば笑止(せうし)がりて料物と更家(ほうかう)のうんぞのゆうれ。おがみてはぶ仕様(しつけ)と秘てうれば知(りやう)ひ仏れむやによりて。おがむひがぶれが。ぬゝといて卒忽(そこつ)ゑて却(りやく)て忘る。ぬきがいの肩(しやく)を合ていは。もむれのあつけとかむるあり。さ。其にかなぐへて。外のたがろすてぞさへ親父(うわび)のなかつてるがぞ(じ)心擬になるをされば料理(りやうり)がよきよそ膳(ぜん)とするには。親父の先二の膳よ。すりしるのをされば。ぶ。しんを知て給仕人(きうじ)が粗相(そさう)に。でお先よは二膳すさが。一膳より笑(ゑし)をつきとまてさきふそといふを次(つぎ)のおやぢ知(しつ)さがにそこれが武家方(うく)の二人ぶちとい外おさやとしくは。膳よおが待ちて(さうひ)膳には大小をきつらへて。三膳(ささし)ですへるを。ぱくは小の一膳の膳は。宿(やど)へつかうでめるはすべさいわじゃと。まかにぬそいふそそあれし。ぱ。落しの焼鳥(やきとう)めがこ。ぽまりしまく紙包でふところまくろかふひ仕舞て笑いてでくれど。給仕人(きうじ)も

我をわすれ菓子が出ればいづれも時節が出ました手をしたぐぞまん
ぢうさへおとして手づから立ちてせるは下座のお茶の手前のごとくかやそ。
濃茶が出ますはお茶のにあてさせたまはせしをゆれば濃茶と申さてさ
すが鬼神よ横着なりとて恥を恥とも思はぬ初心たのしいゆるいたねだ
慶元して上座のまゝ次の人よ座をとりて己はそのまゝ合せ頭持たと
てそでは浮世は住ひがたしそれが為をたてねばならぬ人のある
これおもうさいて数寄屋を立れば貧乏の面がおかしとさみし。
根生のよいのがむすこは能をさせられば身代の仕着せとけとする
とおざなりはずかしうなのぞ。万歳の下おりると勿ひも身は一生
頭はつかれおしうたてば今を渡す世悴が代は古きの音信ようゆくの
ねからにとて名手者に跡つぐべく野望あるねど四とうけ茶にるの
うけねからに流るもとそれぐに拍て渡し名付の頭弟ゆづりて。

それでは万年も性ある人でも死ぬるはおのづからめぐりすぐるそれ悴
一代の中に仕出して家蔵財宝がおやぢが世にある附木様ほどに為を
入ておかれたればこそ今家財ぞよくもなく悴がよいと悦ぶなまけ世に多し
今頭をまもりて始め当家のある浮世に子孫の為とて我身一生栄
花をせんは子にゆづられて仕着ふは大きなる損ぞかし。世の人をみるに
親は始出して四十九日の念仏もすぎまつり五年ならずに皆になると。
振ればゑ極びのおもしろいのをやめて一生涯始末して子孫の為
とて今頭が溜て蔵よ積ておいても愚が子ぞではあるまいかげの世よ
あつて庭割われば子の事をさへ事業風流するによって其身の
か身にたゝるまでこそ流行でけいこし工夫がもとぐぬそ今よ
気がつて事なき宝とはいそ極急への様くはいかなるぞ。おその事を
又は鬼が気がつくもんでいるは子孫の為よ溜ておいてそれにつかひ

くわてすらハふようなる身のうへのうれひて。色好び志てたゞ此世乃極
樂くらんぞ始末ハ一家にくられて。命の洗ざくと古人もおわく也。
傾國花里の色なふと遠清ならる事ゟ飛りろくにつおく始末の
ころハ珠數を切て家をはし命をなすつる家に没なふくと庫
をすてのきつてまへハおり徳上人言て曰。始末計にてはんげいを捨よと
いやよいおとどハ必ずとゆるしてけいにさするとこそ藝にハ身をおさげ。今
縮をつハやゝ世のきゞ身ある家業を謀略にてとゆへつよく学ぶべ
かりにく從でゆるすなぞしむ業のゆいハ和細の風俗人のまうなの
花車にはぬのひとつかれバひろをなぐけまいふつくれずくまそざいりも
よくかれバおろはまりせて気ちやうんみてもぞむじ一ろうりかゆと
これ行きかれバ一盃りくをしまでちと上のろ程さへつまりハおるが
ちょめて身保をならひきいめ用を欠てつよめそけむに没ばなど。

今時のむすこゑすゝくへバ家あるすハ榮耀と名ハ欲ろなふ
今縮をはいや数寄屋長家路ゑ。商賣司の地をせざる事の人合
を始衣服をおさあ方にきよらをはく。付る向上にぬて身代
のさかりと知ゆへよ浮藝を浮世の花と名めて実のなる浮世を
たるすればよのそしへなりかんへいるまりをみすきる中半の業の
親傳家業にて家業に生あるすれバそれ季に掛ひらばゆる紙
よくわるとそ。それはやんで縮るはよ。排乞のいわりもののふちのあ
ほ。一家の商業して古今業で家を守りの千種あハ京氏み
ゆうされ自然天国繁立のおいうとをかはぬきさ。藤蔓のお金
の家状をおそくのれバよそ仮縮律ていひあすれりだ。おり嘲子
人にもされて松風の姫路めうら山旅の深み越みされ不孫も
おそさへおれバ佳りと。累いりうじて自慢しても急ぐ附縮る役

まは翁がつね〴〵の志。無我無修ふでも。経称さぬめハ。若手子の孫
ざるゆゑ。大念手も活動まふて世界同のびて。菩提へ入さセる故し
て是ならバ万の義にハ誅されたる拝同よ叶ふて十念往生に達じつゝ。始
末の二字をおよばれど。つねなる始をつゝねむ。乱拝が手にわくる道。
人和年をよれば鐵をのぞかるり。義自得して全然の妙なくとも是れ
へてまかに広義なるのよふ人。大悔りにまて。無義無修の極称よ縁じざ
かぐめそ志りくしハ追服ふて始かりにはなるり。試ふのくるさご。念称ハ法義
押といふハ宗のゝり。母命柄りて粹といはれて。大悔りに懺懺急と末
ちがふよう加賀らといはれて。只すに掛すめ方が。松山親めよい増て始末の
家ふものまでにいるすを見て。おさや作し。拝君々宗ふよ閑おまみるぎさいるが
あるらわゞバ実に従てきつ志あれからけ。はげつ。ふでおか吟ふ。念で通宮
㊂念仏行者の難なされて今戦家の法めま　せられぬ

中堂志称上人曰。念持至心のあまりに称名をとなふべからず。はげ往て咲せ
下さん。爪ふ光をよせて始末の法を行ひ弥陀を志る。ぬ義。凝心念の出來。舌
唇の耳を洗ひてよく称名せらるれど。称名といふを貶る。すし。全結を守げらく。
上求菩提の本迹を行てすひとつ。れし。無常の理を推やられよ。忍れし法
は只名室をへと云。大信をて。あれて。それハ雲居の栄耀。京世事もかく人欲の
栄花。勝者の寂光土此より。而よわる。されバ。南方の風来世事もいひつゝ。
ゆるの網さ勝つてひて。唯有一門可通の路あり。六字の所ハ六つのちまた
ぐらとおもて。常に去りて活よ和談の気とわせ。ふまハいの氣ずてるべき。
以心の雲漂ひ流れて。其念の光を映だ。法令の風柔便よ吹ていり。你是
の香帯くろ活々の松の葉る。寄あをとなせて。それ布ゆ揚ぶ。小来修を
なるす活の物で。家縁値遇の女并ハ。完なよ天眼通とかくいふさき。空寂
揚座の下。女おおゑぐひといふめすぐ。落つる珈をおきくなづ。剃がずあつて。

太尽事あの者て書か宴に初めて弁才天のかたちを顕して。蘭湯に浴し。
沈水に口すゝぎ。焔鏡に向て粧ひてつくろひ給ふ。翡翠の髪は梅花なよらか
らしく一節けの光りを添へて。心のつよきは。式は鸚鵡の[illegible]曲。ことひくに
[illegible]て[illegible]の如そして。三幅なるゆゑ字を容のたぐひより出る神ゆゑにすそ
ふくらさる[illegible]腰に綴ずかにすそひろがれりさくれば。大幅の[illegible]
おむすび。[illegible]の乱れかゝる手に至るまで朱の[illegible]て[illegible]を被
女郎衆逍遥せる図に[illegible]の天蓋をさしかけさせて。追付て[illegible]向ふ。
八[illegible]の[illegible]楽天[illegible]の地と[illegible]渡りて玉鶴上下に旋
転ぜれば。花の唇ほころびて[illegible]枝をつくし。三線の音色を
動しおし命れ[illegible]極楽の菩提も頭を[illegible]宴[illegible]めして
涅槃の床にいへば。珊瑚のまくらに[illegible]の褥[illegible]瑠璃の
ふところに抱ひそれし。[illegible]此腕の身ともぬぬ。[illegible]山江口の[illegible]

色町を始めあひて。始末を捨られ。いくらか家々もて。家蔵の塵とすくひ
去りて。粋の果はあはれとや。[illegible]の位をいつはりて。上京女郎の身を
以て[illegible]なすべきものにはあらず。其身の位を[illegible]ずして。[illegible]万[illegible]のあたへをとゞめかへす。
されば。下思て[illegible]すべきものは。局小向無利の身と[illegible]で[illegible]それ
くみ分を付し。心くれは濡とふてみちびくものにはよ
[illegible]やぼなく。おまくもしも[illegible]依し。流[illegible]森ら。[illegible]乃
実ある。ものに[illegible]ば。女大和なるものは。[illegible]の下帯を許し。粋[illegible]の揃
まとさつけ。其[illegible]の合和大臣と思しまゝに。[illegible]その事でいふなり。
始末人[illegible]て曰。その[illegible]で上京女郎と存をつくして。[illegible]此の[illegible]
倹とみて。今[illegible]はあから[illegible]に今[illegible]は[illegible]や地まで漏や。
面しく浮世を見るれけ。[illegible]来の[illegible]引物で[illegible]割[illegible]白
[illegible]て満[illegible]し。今[illegible]の身で。[illegible]京女郎の[illegible]かゝる揚屋の

其(そこ)は和尚が揚銭(あげせん)出さぬうちの咄すには、猶と高座にのせらるゝ大ま
記録をかけらるゝとても、すべて明き目で見る者もなきほど、猿口(からくち)窠欠(こつかけ)む人
禅円(ぜんゑん)でも、今宵ハおらが相ひもなくわざやら頭ハ浮(うはき)なる咄せら
ハ、始末の二字を説(とき)せ、今宵の大切な肝門(ゑんもん)を会点させ、つひへぬ事に
つとめ、失(しま)ハせぬやうの教(をしへ)をときたまふしが、独(てゝ)身のみな咄ぞのよ
小女郎のおりくれ、口舌(くぜつ)のいひまつハいのつくばうの地ぐく、ハらめうあるよ
みなよりおこの揚銭(あげせん)まで一倍の咄する利積(りつもり)でするどき積乃よ
を母ハ越して、さきの寺さ生花神の風よひらめきさる。らんの郷無を脱
て十徳(じつとく)の衣ごもにて一般とこして因お餓鬼(がき)のいもを
うけ、女郎よ逢せし越傍の経つ亦生生の気まゝ発(しつ)を大せらる、さる
迷乱(めいらん)の咄生今より気を改め、性も祀よ眼をさらし、それぐの家職を大
るよにうけまへ、今宵よりてハ業平(なりひら)かゝつるれせぬか美男(びなん)でも寡悲であし
らよ上戸女郎の無(ひら)事を教へて見ひ、なよべてすと、始末肯繫の本よ大
志て銭がいつゝ入る迄をたとひて述(のぶ)すべざるの絆(きづな)れ上戸女色乃和
尚連(うれ)も、今宵ハ始末より湯(たま)ハつて、一句(いつく)にて夢の閉口(へいこう)の角(かど)あにしけ
まハ、当年こそ三度女色家の負(まけ)色とぞ、色の後まで(まで)ゑ汗(あせ)みぞらう安
こさるもなかりし、所よ悪所より出てその算山(うさんくさ)古狸(たぬき)の久米(くめ)とむ。縁(ゑん)よ
貪欲(とんよく)の中(うち)悪(ちやく)をさげ、赤きでんの緋(ひ)乃衣よ。慳貪(けんどん)れ来て鉄(てつ)砂(かな)ハ
熊(くま)まで口の邪欲(じやよく)をくゝへ、邪よハ念(ふんね)怒のおんとわらかし。よ分(うさ)打捨(ふち)て小(こ)
頭(おどり)ても、はりまお、一切の女色家をするめくかつるよし、嘔(へど)つく家
家よ承(うけ)たり、むりやり菩薩の、そのてるぞて、天狗ハし、すゞまでも先(さき)を見
めく背のろぞさ。魔魅(ゑんろく)の久米とハ悪僧(めくそう)とれよひろくるりきぞ
かますまや、今宵よりてハ上戸女郎の其(そこ)にすひハやぶとの縁(ゑんゑん)ぞ
つやいえ志ゆるが家じやざるまぞされ、高座さるてまつれと、ぞ行なしに

あでやかなる代物とてハ売ハなされまいが仕よ方は女も利のある
ものぢや此の様子で知恵がわけて損が来れど留て置けますし算も
うごかさばいろいろに売つけさしやるもの又世間の気質相応
半そ太夫ての出来事はつまがしやるも同じまつた世の者けしからぬこ
とがみ仕やうか月ごとの里へきてしみ付いてもおかしく若
そげなるやの生女が旅人引とめ申に袖つまをとへて打ちとむ
申にわすれてうかいさしやろア、商がなうかがらもむつかしいふ人ぞん
る甲斐ある風俗ではごげぬ也此のおかたそうぶめそもんのおのがかれ
太夫ごときをおもひ人の女まれなると憎てあそびてとおかしめせバ。
生身もおくおけやの女まゝ、ひとみおとのをなされねば通例で
かうなるすではござるぬ。それよりつるさの姫に心ざしやて余の商ひ
他の中に貴賤ともにおなさの家の門々まいるもの者ではなし。

そのくせむすこ達や代々のまうねを今おそこされバこそ悪
性もくらゐわかけれの一番子達で。かうしてハいれど親が衣裳
美かざり狂ら形付そ見せますぞ。ずつと仕つて内証は心に見
せかけそずいぶん細目して後の立も嫉妬で。ゆくに親い気位が虎
つきの出て見せかけて売付るがこちらの商売。今をおとずれにしや
る商ひわがわるいこちもつまらぬよ。イヤハヤとろい世がこちではあるぞ
と間夫する者命をとらへて打撲する中に程実もないいもの
から

浮世身持談義 四之巻終

渡世身持談義　五之巻目録

弥陀本願四十八枚の紙子と
脱で金色の肌を現ず

第一　渦に抓つく判突指を遣女が返答

大坂の

遊女も勇むる色と欲ハ商人の
店を飾る同じ印そうかし世
流の所作待る身ハ今様の酒法
よ落る法問諍ひの要

第二　女郎ハ間夫ゆゑ情を捨さする商ひの元祖

此段ハ

色と離れし孫子の親にはハ粋の
果をしらする上手の女郎乃方
便も付わざ口と冥てたぐひの?を
帰すべてかるよ?かるゝ?紀を

第三　諸商ひ繁昌の元居掘たる色里ハ賑ひ

此段ハ

廓が扱ひハ桓色門の法滅を補
御さ藝ハ芳の?八百八?市
町の栄へ?き世帯仕法出家
千人全の者

浮世身持從義　五之巻

㊀ 客にもてなして招きて遊女が返答

世界の男を迎客へ入て睡まさせるわざ?は万人を一のとなる
切者れ遊女がんからかおとつて?女全を残ずこ商ひとなさんや
らまするものさんにかうゝさらひ糧とのきぬれバさすがの始末上人
も今をらずふ商ひとするやうの?家にも??の?縁して
見てつれバこの頃ますこ此神をとみていさりおしさわ此返答は
らん。若き??ハ風の便れ衣をものぞこちの里れつゝら持ま
するぞといふとつめくるぞ徳上人ハおつもさの紀結などの始
末人を捨金おつろく客られるハ?ときとやらぶでさ世界
ま今とらびて商ひするものハなし志いし積くがし度られ生ハ訳
ひろめるにハ傾城ぐるひ法然?ハ浮世のさゝわが家業の始かれバ

又悪性とやめて一向一心に高覚のうけに誇でおされよとの説法と。給茶坊
眼のふつをとる我と免と制せよとしてハあさ害つみよ悪所に陸㐂
し。儒家の淵に沈海に。永く闇む愚者と助んための世帯仏法と海る
がおがむる禅宗門のすゝめにも。身をとこらうけて悪性をかく
ゆまぬ。儒者とせざる中に教と従えと嘆ば。さいて皆我家の立流よ同
じ。猿る時ハ此方の家業とさるゝにつけて。おして今宿とゑに推らるゝ依ん実
と倹約と蔵し。世帯仏法の支障とけするハ解ると。海るがすらうをの家に
は。身ると本業にて悪性といましめ。身をおさると教和しけるからハ。此以
後我ふたねば。依するふきをしけと。色ふふの門へすゝむる事をやめて。一廓
の寄ば百八煩悩の珠数と切て浮気せよく。遊女を和尚ぶりうを
ふつて君ふるハ身をとこるにつけて悪性とせく教ハ。ころちの寄まへ
説中女世ふるゝハ分ゑば。此方の家の立流ハ世るの袖ぐる他宗よ。とハ白

嵐く。おびかるゝ傾城狂に迷ひ。実家の蔵を代々を辞と欲として乱暴ひ。
家業に怠くる。かしこいぞき恋をすゝめてども。浄土の教と従ふれバ
何ぞ猶宗門の不肖と守らんや。有徳上人の遺を守て。家ひ我宗と学
ざるハ言下の無縁ぞてそちの家ふよハ。家業を怠惰にして悪性を制
する教ハなれバ。遊女屋ハテ々どいる。悪性とかいハ此方の高覚を。仏とならぬ
ひとふ者と。必後世のふうが。あぶつハかなる今をとつかねむすこたハ。こちの
里ハいまだそを未ぬゆゑよ家業と続わでもそぶらずと。情の出る。
ふ。徒然の坐をすゝめて。色の法春とするよれバ。そんな実験ふる事
ハ仮の為にも従ずと。色しそぞ。西陣上人ぱ。づけるを。始て海志
や。流よ当節の同じやするとの味しふ。海できの邪見顔をの素で歯を研で
女房と。ふへて。弁人とするにハ。わざや。海ゃが教と嘆ぬ時ハ。親ろさの
耳へ入て念仏止と。我ハ庭の柿の木にくゝりつけ。小刀針をとって呵責する。

是いかなるゆへぞ。今時はやりてまつる者は稀なれば、それは粗略にして我和をつとめて
拙ようする者まづ一度ぐる女郎を我に迎へて習熟する者は僻目するずら。掠
けいせいの身は先づ一つきの為にあまりてらるれとするなり。然るとも栄耀
慰ようにゆるしはあるぞ。傾城のなれる大切の者にて面白くべく、大かたの金を出し
置つるぞは、けふ家業のつとめを疎略にて、揚銭よりそこかわりなくての
為我なるよふに、金つかふまじきへぱ、多くかせぎて口説をきかせず、又作病を
起して身をまつはりてゆるでゆけて、上手にわなるしやうに仕かけ、ぱらりとせきまろ
ひて男の間まで、袋を売じ合せ、男は上がりの中にいひまで、何かと
男孫ども、我は偽りをかくるといへども、身がわりにても女郎は何にても所方
のひとつの我つとむべき家業を疎略にて、身の為よろづはね、けいせいは
ひとすなはちひくかくずやと、勤しそでするいは、しやう方のなるいは家業をと大
るにかけて悪所ゆくなくいふ教を守らずなあらぬやうに、従ひ家業のつとめを

然して前ぬ悪性の者ま一つのひとつそのまくさせそくやはし遊君いんしん待つけ
まへば、鬼神でもひらくん、わ遊女もはし一句まであかるイヤそんなる押よあ
らぬその女郎は、百人の中にひとりかはしと、唐さ口をすがめ閉口のきめ見て
それば始まる人へ、茶屋なる利しぜんくぱさくとそてすきと出す。今有徳と
人のいひて、遊廓家の様子をけるのかきくて、遊女のすく男は女郎おすみが
らず、世界のこのあれば親方の為よろづず、抱へつとむ女の間まするは、所方お人
ともなく、打店の仕打ともがて色里へ打出せよ、同じく冥加もつきいて
行末よろしくらぬもそくて身をとるものの、それくの勤は同ず。
商いと疎略にて、色事に情をつくすも、女郎は為まくろひて身
あづかりの為の偽ぎ偽をするも、かかる事にひろまるとしても勧て教を従
かくは始末寛略の家門は、今より活かせよと、身をうけてのくる女へで。
然かあ和尚手指をそらしきせるおろずぱ、懺気ていいて所ぐさのころ

むすこ達の家業を疎略にして色事にかゝるさと。女郎の間夫狂
ひとに一致する事ずこちの里へ通ふね揚屋人の恩づめとてくづのちがひ。
そのくせ商ひも手は元手をかぶり無宿者となりて。おちぶれて人をよぶとは
稀なるものにて。家をほろぼす元なれ。仕似せは年々商売にはよ
みきの縁利をおのへ分すや。家を商人の家業といへり。世帯のもと
する事をも宝と心得て。悋とまぎれ立て恩を忘れ高慢ぶりあふて。今絹物
ね貧者の風ぶりて。絹なりふりすがりくして。今おさぬ人なりとて分げは
おらひなく人なりかなとすれば。客屋は上までは悋志つね。様よつく女郎じや
と廓一ぶ言名がなくなりてはひどうとくちんせいで揚屋よるかなるが出つさ
よ。悋の客は様ほしの揚人よりは身のかるがると見て名よくおせて悋とらけてある
が。則商ひ物をかへとかざる揚屋をそ悋ふの事を縁利とよろずよい
それで今世上では招からればよろづの格を見て名をされ。いうとてもを

ばからぬ者とおそしてはげんの方便も又しさる所の付てある事往は恩金の
商人を又どつれて賞和仕はまる問屋の見代へ追服すると同じぞ。太夫衆を
しおべおがの氣に入てあるのは。親でまるとてゆへは。ある付ずる事た縁日
も。萬事に染て愛染よおする成り。あれは物理で小袖和紙をとて女郎
の客へもあいすくかぶり様て女郎の言葉をつらでは付ざしにてもなめさせて
悋でとは女郎の客さや家中の揚人分が縁どの本と縁むすぶすると同じ
格をぞよいのもとして来ておの太夫様にまなぎれもせずくしめてくれるゆへよ。
忘るね商ひもして。粋が分つかぬ月どもぞとおそれてかへ。やっからるへけもせんなよ。
悋らかして。親の身ででは頼むぞてもさせ。出入の万屋の者を気にかけずとを
ふぎるせ。八百屋のちからも紛そ悋ぞせをげば。あつかれ人と世間にきまゝ
大夫殿と里へござる大臣衆へは。このまゝ○どうぞ添ふてくれるゆへよ。世間の日に
四十五六で悲て親を見て法をつけ。リが身も紋日をまち中にてゆか

近ごろは浄るりの二代め竹本政太夫さんは小刀鍛冶の弟子に揚代を
しくまうへおもひ江戸にて古今の尾崎さまは癩病人を弟と申せし身は
新町の夕霧さんは座頭くろの手まくらで思ひをはらさせ長崎の丸山丸合
山吹は非人と契りおもてやんちやも気まゝにてもあくしやうもおほし。
色情は名をかへて多くのよし人を引うけて弟と妻んなの
高ひようとつけてはやく家業を疎略にする。然者とは違
なり。たとへばおいしやで来て藪医者の様の多くの丸薬様の業を
手なくら命丹など薬種を求て十徳着し一心に言葉のもたげおのゝ知
縁ちつさの方にては及ばず。薬屋の床几で腰かけて聴る人々
子兄ちでとのぞいてほじくるを目ちにする人煎湯でしつかま入る人の名前
中でおよそにて手付金する一同の人のなかば。おかど年中を廊へなげ
ぐつてやひくだりてまゐりけれどもしられぬけるとりなに病人をまけべ。

余所の病家へ見舞て医者でござるあるゆゑよくちとでございますによりておもふにね
ば呼にきて薬代又一銭もとらずにおかるゝやうなもので弟あがり
して祇もののやうで円ずるむすびすれば年中の様な業と同じる事で情知とは
冥加をせられてよい坊主とおもふその言ひの縁組とふすのでござるよふな
楽で見まへごまかしやうてその目の前に出びたれば男から人物か寸伸子
一時で来るやうな男は弟あがりにて何の因果におもふのでござるぞ。日ま
いふへあひをせうあの嫉妬るでござると好色を勧めてあの流る中にれ
延られば傾城の面をなくして客も気儘なり

(二) 女郎は真実に情を抱き郭の高いの冥様
力をも今で人の家を傾けかゝりせ。吉原の中におゝく銀の為をすゑ
て殺すよきする神通奇妙の花魁和尚行屋をひくさき様をさせて
むらさきひかりていはせずの中に姿ばかりのわけゆるされなう。

しよく織かゞみて大方の手稼は仕まはず眠りて前口にてすゞさ両手とばゞかき
来にさうふらそてるの上手が成人のむすこれ化されぬめり聖人やく
女房の上手なりしおぐれのうれなど能きは申まして情のあまりと名をおう
いさんがいままが身あがりしてのかまくろびやかにわがは我方も中こても高
ゐの方位し今昼ではおやちにはうまさぎまのはゆ味はせ津ぎき事
あるはさかぐの打揺とくろうるはそれりふ蕃士三十ほとりがめ。後ふの色里
が浮名は男とくるましければ又は浮名立てもまた夫のかるのかほひ
切りぬ中なら手の中に又てふの色里へ来てゆれ或はへるたな筆や
風呂やの猿と家に垢をうきそ名を流さと女房かゝるそ皆町のむすこ。
親のよんでおそがる女房できまひけいせいのなづきて動き田うけ込んで私は
そくずて練子下手の浮気女とかふび我身ちかゝかの性悪といふもの
あすずやいづれ今の浮気な世のかゝり業がまて毎夜よりひまなされぬ。

色の道まえ腰からちとりぞし。どれもどき徳ゃんの工中。恋をある
縁ことを強ういでやれる情を忠実にするいひそてあるべきものにてある
とてあげく直よむすこの親一門のよおもふそ尾にぬさ夫なり。又は自
分の世帯にて家をも仕出ひさうまゝあろて来るあまりは異見をして
ちをざく色家財とも素性ぬやうに我が一男はいつまでもゆるさぬ
がまゝの情で。商売にするといふすのまゝ我すまつて男ぶるを。字に
入ぬ親となりて後をとれ招くのまれ給とうやまわせて今はニつうひま一緒
もおうくす仕かけとしておもせず又いつとあうれいてそおんな男に人中で
あつくまのあとさそどの浮しきまにも名おおしげはついて来そ。
まぞとくるて来つて徳よりちとお袖へ手と入後ちよ助と一所にて気いない
俗を強うくいかせて妻子が衣服をと着せちらして若き来るやうにのが
世。武士町人よ沢とおか大家の。それくの身代ぐなとつまりろく。大かる

極楽のなかの主といひかけて金をさへあげる子金さへ身あがりの借
銭の方、中々にじ身あがりの仲のかぎりのまへにもひの恩ははかりなく
く金つかふあそびもいのちまでのかかるわかきせかいのアまへの結合よめく
ひとのあれば恋とぞ深く慈しむもの有あるにふかきの方にていふ数をもて
筆と名付け方便の才一とせられ、よしぼ方の有てて御衛たち傀儡
ともいひそめへなかなかの妄縁とうてて忘程かるのさに口のつき蓄ぞ
わの歌舌に迷はされて恋ゆへ神もさ、傾城の淵に沈む宗あり
身の名をなにか世の中にはのさたよめぐると、往生の悪をかさねて
三界あへば那波丸が成れ織上人がゆるぎ出ていはく、ほ不母命の内陣、
すくひれて無比のその人をもんがためまず若又魔の転変が邪
天をもまぎ返す方極楽浄土世界、みちびくその方便の手管といや
しめかくろなどく悪名を付るのも恥やさいはしよしやめらるといわめるにも

世よのあそびとなどけるの愛あれば、様の恩にて立べきが世の中にほひろ
めるうちの中に万勇臣は栄耀にくらし、あはれるする傾城にてゆききあり
海をへざきてゞそうらふ煩悩ですまふべきも直世方より傾城の勤を
以後ともはの挑発するけまれば情而もとべきゆかもなくは傾城の行となふ
こ有り秋子家に殊して、なとれる年ばおうらひすことを悪むものに生立て、
まづ弓をも見かでこちの里でならひて両要国もみれにつぶたやうに。
世るべきやと御法し、花にとりて身代つぶれしといひ立にて、ば方の家
門をまぎずと付ゆうふ数位家もあると学ばかるゝの愛は今をも万
まかいりてそのよい衛といふ女の、無遊人よりはみくしげうをのの家と
ひとつ口にいひても、いまくしの人の命は今絶にもくへと、ぢ一刻も命を
のばす枯れの里を悪所といふけしは、命のせんぐに私る要を止る。
始末上人は人参にて絶命をすくはて病人と人参代の絶を憎んで。

目前に殺すがごとし。世に今宿と変の字を上とすれバ、必死の病人とても
すひ出のそのうにてつかひてぞ出生するとて変とうやまひれなりど
やわらけ湯て貧家門徒ハ、朝夕始末して妻子をやしなひ、孫も生き
ず。剣にかけて変とハ、富家の放逸の者財餓鬼、使人の目をつける
紅裏ハ始末の眼に火焔とみえて、万の袖わも目にハ見ず。ぱつと飾らぬ
をのゝはたらきもなど。その始末して年来つもるほど目らきらの珠
数を切てぞ、まく色気ふのゝぞれたすゝめに出てぞひ、今宿とあげらく。
傾国世界にあり。八葉の小ぎんにさとりひらけて、艶顔に変をあらハし。
容色嬋娟世になびひきぎ、八十種好に三十二相をあらハすろくれ
欲界に囲繞せられ。今のさうづき宿のあるじ。七変の現ぶくれ。沈香
珍味の数と豊名香の追風にまかせて、彼岸に門前法末社ハ、大
后大臣の佗きぎんの楫をとれ。玉の名階のかげり。無双の楽をと
きハめ、ぐハん西の極楽に住すあれと、頻伽の声を出てすゝめへだ。有徳
上人も心両親に迷ハざりしと、両手に恩愛の玉をかぎつて、目つふもすゝめになせ。
始末の珠数を切て、ちまをあし。西方に赴むけて、さゞめき成す音声に身をとなげ
うらかなし。須弥天のかゞりの花の露ぞをさげ、今なる身をとられて、下家へ落
くる府の仕舞ハんとて、卿ちそのぱ世に、あるならハ、身をもくし、湯ぶね揚屋
女まハつゝまして及ばぬ。指切髪切爪をも殺し、一枝起請を書てすゝめられし
女郎までも彼岸に至り。末石の身より出せる、今まで遠色の花なき府ハ、ぱ娑婆
でゝんさまに遠ふぞをせで、さんおもうろく、中にハすくれ、慢情と高慢とさるき
寄るにハ、ほふ義にんがよむひとへのせぢんさく、太夫大悲のせいなふしやうハ井下の
中にゝて、内心如夜叉の声を出して、くせふれしが、そのひとつの女中もにはわなれべて
勤女のまゝぞんいでもつくし、みちんそへて寄のそぶくれつめさは西をさして
仏の庭ハ三途川の姥たちもしらば、始末のあふつにハ、ぶ財物をそこりわかる

ちろくわるいは弘(ひろく)念仏の法、莫太(ばくだい)しなき利益ありとまでに揚(あげ)てをも
お小判(こばん)で買(まう)まゝ中々にして、少々(しやう〳〵)の細緻(さえ)ある仏の耳は極楽(ごくらく)へ往生(わうじやう)には
許(ゆる)さじ、きん人の門(かど)は立(たて)ども、極中のものゝはたゞけに指(ゆび)をさゝれて、さらに強(がう)よく死(し)せ
しと念仏はなんといふ物か、我念の前ともらで繰(くり)ごとなるを
の字は何となく乏しくて、人を前(おもて)とさまざまに中にはすゝめて祟りの字あるぞの
法華(ほつけ)は邪人(ひやくにん)すめが知(し)る所の経文のすゝめには従ひつゝ人を捨(すて)て宗旨に利益(りやく)なき太臣さ。
ひとの悪(あく)がわるぞかくまでに一生安楽(らく)にて中々にて中にも菩提(ぼだい)の縁(ゑん)なし
と念仏をまき捨(すて)ても念仏(ねんぶつ)に功(こう)なく、ありといふは根(ね)がなきゆへ
捨(すて)らればこそ法華のとゝへをやめてさんねんで宗旨と念仏の門は入べきなど
ときらるに打ちてる菩提の太臣と云ひさる例やあらぬさわば返答(へんたう)もせん
と法華の名法の南無上人席と打ちまうけて、よひ女人には附(つき)従ひ色門女大
和尚と云ふ出(いで)、法門にとらんてかれは色の法(のり)まはる一寸より汗(あせ)を

まじり今こそ折色門の法滅(はうめつ)し、さげ首(くび)してぞありける

㊂法華ひ邪宗(じやしう)の店(たな)拡(ひろ)ければ色里(いろさと)の取(とり)ぎらひ
茶ろ(ぞんじ)につきての事る事に男(をとこ)れば必ず菩提(ぼだい)ある事ぞ手に男れば其の甲
斐(い)なし。たゞ人々に宿(やど)とらせ我(わが)身と見(み)せて男に心(こゝろ)ざるがゆへなり
なる粋方(すいはう)の茶屋にあひても云葉(ことば)にてころとさする心(こゝろ)よみ首(しゆず)に女郎(ぢよらう)も。
極楽(ごくらく)の是(ぜ)は法華と結(むす)べばわかくは化(け)とる寸(すん)けども粋(すい)里をなる茶
まで所方の実(じつ)をも理(り)に及(およ)びては功者(こうしや)の女大和尚も返答(へんたう)にあぐんで。
頭(づ)よ閉口(へいこう)と見(み)て、ぎやる人々はて細(たう)を操(そう)まてさあは是(これ)の字(じ)を誓(ちか)ふ流(りう)
面(めん)しそのらて捧(さゝ)げと本尊(ほんぞん)はいか七字(じ)経文(げうもん)の縁(ゑん)とこいふ郎(らう)の君(きみ)法(ほう)見(み)て
とらずのにてなの事(こと)猪(そう)まけらけ殊(じゆず)数と切(きつ)て法華宗(くわいしう)の法(のり)さこ段(だん)
宗(しう)せられては色里(いろさと)の夜(よ)る今世の更(さら)に消(きえ)て閑(ひま)なるいつもの志(こゝろ)ある府(ふ)は和(やは)らく
まぐはるとあしと往(ゆき)をて法華宗のその注(ちう)の南上人を向(むか)ひやけるは、げさ程(ほど)より

天下太平
光明遍

此従はふを種々作りに始末のはなきつハ、身るきを此にせよすの仏語と
承りれバ、当世宗の立流の往生も承りて、後世の為よ弘めて之を
つくりぬるさ後生とまゝつゝりてれバ、存ここぞより後世安心決定の示よ
いやそいつかり申さぼ、又は宗に身をうけらぶつひらて中るに迷よ
とくがくとすりうんとも世ど、又ぬ無ところのは、さげしといぞのつぶさの始末
宗の中にも仏法を付てうるつゝる商人ハ、商売さ稼れすれバ、後生もよきん
うしろるさがりてよせつけど。一門でもは後でてうすと世るの人ならいハせ。
惣じらいものにさるむさい人もあり。又ハ年を歴りて甚しきものハ年来を
役にたてざりけれバ、さ多くの邪癖といひてつぎおし。一往の合力でも惣合
おありきりれバ、宗ぶつりひできたる者ありた。一途にはいいひがとし。所
経はなの宗縁ハ損若もいひて、諸方に往復もうす損失をゆるね
中にもあつかひよせし。又未今の身をさ後生ぶるよ入てよ始とす。

始と知る所ハ始終人々、身をお家で先しいもの人へばり久念は身代お益
の様子とみけりや、去る勘定より住居のさき年にも、まだ給を方々無用
よろしき人のふるまひの事は、大事積の出来途よあるべし。諭る人
まもの身体がたけ後生ハ天職とゆるされ、我が老父たとの人囲み
のぞみにまかせあへ、それでも給ちもちがはで、出家の人ハかく我ある
今は始末上人の役は、そのべき事まで。近年世上に身体出来ばぶ
ざる人大分の借銀をして分散しぬ。人ふも損をうけ、身も難儀
せるハ、領主の身目をに、呉るまさ出しき出し、二割三割の利銀
まで出しあげ。親兄弟主人仕人の難儀といゐけり。かく損を極めあり
ろうえハ、こ害もさびしかくずみ附るこのむすま迄も深入はしぬる
又ハ諸方の宗門も此まのくと弁小便りにてあつかひされバ、始末と
人のうるり、浪の命をとるもむさくせうさと思んで、かへる始末ぢん様ざらず。

ゆゑが岡谷にまできまつし三枚肩にて家けらうすうし御無さん
なるみきもの。一里にてね雨ふれば風つよげにて行べき𦾔さぞさぞん
同船の無学盲の者がうるさのうさ才一のつけるふれたべき方さび
れあつひ深入なれば法をよし震さ受にいかる者のうへそのゆくしすき
とお納しての世て行べし。去り説くのふ同前するかる者まれば江戸
京都町々と婚末の年をりい御通帳くふ付るる。いまの御加瀬か船
の御用とすずしく毛とうろかあるそひの紋模様として言籠和様あわて
来すし、いかる毛によりて桂るうの門の女大和高速西上の入る一紀しく
廓院より帰りかうひ。くるつのわるきひ和様して。世るすにふけし上れは地愛
とい三すえ社口の君の五百五十両の年をるすぞ物かうろんとぞ
ぐの名里の桂君、四文とつかう分ぎし性様入の今様とあわや江口
の里れ吻仏は脆弱でそ、浅子の世楽茶でもなるすか江と向

御かのうさいまどの君のつるとしるくしちヶ所にまか塀でまつひあまきこの
始末よそれひとつかう花でかざりてながやさんの礼におそれ、ある府経
の派ぞことをひろべ新造のともがらをすすめゴレあたら建立の年おまへん
せし。せさうさなるおかげそすすめまへいぢおよ年立の長家来付なる家の
本宅の囲女郎へ為名をまとめ子とつづれいぶる末のんくにふかうの
君が名を聞て来付君のつまにゆまへさせ。所く縁ともすませあふさそ
傾城の色里よりの挑灯いぱ客の林れあくぼうるとて及ばぬ京までぞ
うしい後の守師として江戸より京都浦京難波新町の三ヶの名
女郎にみかぶろせりてをつれて本所中れば室の花おいおる花月花山
の四ヶの色和尚。西郷にもすすきき三高よ松ふ丸とのせて速に出立一
名す師の貢君を招待する。けふの晴と眉をつかうける。武家家かかざ
り蹴出しあまえの名中八文字の行の作者口をそりびやられたるぞはるまと

始末宗門にて守及びけれバこそたゞし今度十露盤供養さはじめ。
拝ませ申す事ハ始末の為に倹約節略始末の法を示し。永く面々の家
をたもち給はん為に御教を従へしと。世界町土蔵院まで銭金寺の
如来を開帳ある縁にあらざれバ銭なくひろう欲の池はよろまらじ乃
銖のつもるをしる所におのおの人の手おしえに徳をさせてむすび付。節倹が
の苦患をのがれてゆかん事はいよいよ発明と云ひならはせねばならぬ
志の人。広大無辺の仏の御ちかひきこそ有がたけれ。始末上人の有ほうと
かならず九九を唱へ。九九と唱へ八算の割声を出し。見一
無量のそろばんを執し。何九の一と唱へすべて算一倍一の無量のしらなかう。
鼠算の出るとおのおの増す増すの算用して有がたき世界の紅法
独楽をおぼえて。拗活高貴結縁のみならず始末有徳の家
上人代々伝ふの家風を拝せまいらせん。始末上人の方の是本意なり。

一字世界の算盤抗弁に一万これの割おもの切おとし。大家
の基あらはれて万。精を日々に上がらねば業に励ひまの始末乃
そこへの為に弥さ作らず決まる利と日読ち周分和尚の十一文字
の身や華の是信を報ゆる世界で来はかさびいき悪事の根の毒
ともすなを一切所まにせんで万六月千も立付と成ぬるべし
給いども。四日より勝て出され煙管より毎りて世のこの所踏をなんぞ。
小銭もつて得る利を皆ふんと。其欲人ハちりつもりて無縁をむすび
あつめば文殊帝大師の名がうの仲の是非。其の神よりがうしきれ
つるのあるいは何の手割にして花もれ除けどして弱くとる者は
ざけんがうれ除けど。後悔の涸をまさずなれし悪し。弁に稼の者れ
十露の手段の正すにあらずいつろ人かうとは余くも
拵有徳上人の什物ハ世界のおきの千両ハの小判箱に元気

吉次が用とせし古祥寺丸吉光の袱紗さげの汁古の有徳人
の名籍蓮おれし慈童ども□おすせられ昔より今日は滅せずして忽ち
ぐさき袖られしかつくゆるれいおびに一跡をつかひへらすと。世常勤方は奥儀を
おろど従をふられ今それは後商人録を考ずれば従はるかに感深と是々も
なは大事と候ての縁をつとめて家をうるべき財寶し数店持つ事となるぞ
あるれりてばふるげくそれい若手はうけるそのつきるひの数持こそ肉施の
ちくゆするを附けれ其とみるさず文穀忠従おきろひ財宝繁昌なるさ
き世帯代々の鑑とぞ絶ゆることなく指よきてるひ家の富も永代も
老後は今もそのためなれ　渡世身持談義五之巻終

享保二十年卯正月吉日

寺町松原下ル町

菊屋喜兵衛板

義經倭軍談	作者其磧 全部六冊	賴朝太平記 作者其磧 全部六冊
花實義經記	作者其磧 全部六冊	曾呂利狂歌咄 了意述作 全部五冊
商人軍配團	作者其磧 全部五冊	一休ばなし ひらかな入 全部六冊
商人家職訓	作者其磧 全部五冊	諸國百物語 ひらかな入 全部五冊
世間手代氣質	作者其磧 全部五冊	色道七ゆるぎ ひらかな入 全部五冊
渡世身持談義	作者其磧 全部五冊	手管三味線 ひらかな入 全部五冊
其磧諸國物語	作者其磧 全部五冊	美景蒔繪松 ひらかな入 全部五冊
其磧置土産	作者其磧 全部五冊	寺町松原下ル町 菊屋喜兵衛板